16
5
146

安德天皇御事蹟考

史談會

No. 962/XXV.

序

史を讀みて壽永文治の頃ょ至り誰か慨嘆せざる者あらん綱常斁れて彝倫廢る天道の否塞亦極まれりといふへし蓋し一治一亂は天下の常勢にして古今東西其例甚多しと雖も

安德天皇萬乘の尊を以て海に投して崩御〳〵給ひしことの如きは萬國稀に見る所にして嘗て國體の美を以て稱せられし我帝國の醜汚之に過ぎざる者なく忠勇義烈なる吾人臣民の遺憾亦之より甚しきはなし

然るに世に天皇の密に檀浦を遁れ給ひし遺蹟を傳へ口碑或は文書に徵し以て所傳の誤謬を辨ぜんとするもの尠からす特に對馬國に於ては其事に關りて頗

る信憑すへきもの多し舊封主伯爵宗君曩に國分氏に命して探究せしむること年あり其收錄する所積て一册子を成せり今之を活字に上し付するに他に傳ふる遺蹟を以てす要するに彼此を比較して

御陵の所在を明かにし以て史傳の誤謬を正し國體の汚點を滌除するに在り予亦茲に感あること久し偶本書を示さるゝ及んて其擧の美にして且吾意を得たるを喜ひ一言を卷首に付す請ふ江湖忠愛の君子幸に之を賛せんことを

明治二十五年六月　　薩陽　市來四郎誌

目　錄

一　安德天皇山陵之圖
一　御鏡之圖二枚　一枚ハ左篆文　一枚ハ右篆文
一　玉葉
一　醍醐雜事抄
一　賴朝賴範ニ與フル書
一　原田種直文書
一　西田直養入水考
一　鶴峯戊申史傳摘抄
一　烏鷺說
一　靈光院殿遺愛錄
一　宗家御系圖　杉村本
一　宗家御系圖　一本
一　宗家系圖

一　貝口村河野系圖之序
一　仝家譜
一　豐村須川勘十郎所持古書
一　松尾系圖
一　浦上系圖
一　串崎系圖
一　大庭系圖
一　梅本私記
一　平山鄉左衞門私記
一　柚谷私記
一　柚谷古實錄秘書
一　彦山執事答書二通
一　原田家屆書
一　豆酘村觀音寺私記

一　內院村齋藤申傳覺書
一　梅本坊ヨリ聽聞書
一　鐘崎對馬屋久助書付
一　對州梅本坊ヨリ對馬屋大吉ヘ渡ス書付
一　肥後國五个村ヨリ嚴原藩ニ差出ス書付
一　筑前鐘崎壹岐某書付
一　唐坊神七郎國分六之助ヨリ內務省ヘ上申書

對馬國下縣郡佐須
鄉久根村大內山安
德天皇御陵ト申傳
フル古墳之圖

下馬スルコト古來ヨリノ例タリ御陵ヨリ申酉ノ方山ノ麓三十間許ノ所ニナコトノ塚ト云フアリナコハ納言ノ縮語ニテ納言殿ナラン歟一月十五日ニハ御酒ト御膳二ヲ納言殿ニ献シ奉ルコト是又古來ヨリノ例タリ此村居住士族初村某内山某農初村某三家ヨリ役ス又辰巳ノ方一丁許ニ小河ヲ隔テ銀山上神社式内アリ里俗御所大明神ト云フ

天皇ヲ合殿ニ祀奉ル御神躰ハ

天皇ノ御物花形ノ御鏡二面ナリ古篆文ニテ壽永用保ノ四字ヲ鑄付タリ圖末ニアリ一面ハ左篆文一面ハ右篆文ナリ

祭ノ日ニハ少女十二人ニ幣帛ヲ捧ケシム祭果テ後其幣帛ハ拜殿ノ右手ニ一間四方斗リニ石垣ヲ築タル中ニ納ムルナリ其御社ニ續キ御所ノ所ト云フ所アリ其後ノ山ニ御舊跡アリ　皇居ノ跡ト云フ樓閣谷クナナシ除ナト云フ名殘レリ樓閣谷トハ黑木ノ御所ノアリシニ付テノ名ナランクナナシ除ハ口無シノ義ニテ支子ヲ云フニハアラシ古今誹諧歌ニ耳ナシノ山ノクナナシ得テシカナ思ノ色ノ下染ニセント云ヘル如ク世ヲ憚ラセ給フ御隱家ヲ穴賢人ニナ言ソト言語ノ漏泄ヲ戒メタルヨリノ名ナランサテコノ山ヲ大内山ト名付タルハ恐クハ昔ヨリノ名ナラシ

御門ヲ葬リ奉リテノ後ノコトナランカ又嚴原八幡ノ境内ニ

天皇ヲ祀奉ル社アリ天神社ト云フコ、ニモ御鏡アリ藩ノ比七月十四日十五日盂蘭盆會ニ盆躍卯藍塔ト云フヲ奉納アリコノ盆躍ハコノ神社ノ御前ト宗家ノ菩提所万松院國分寺其他宗家祖先ノ靈前ニ限ルコトナリ對馬ニテ

天皇ヲ祭リ奉リタルハコノ嚴原ノ天神社ト久根ノ銀山上神社トナリ大内山ノ　御陵ハ明治十六年四月五日

安德天皇山陵御見込地ト定メラレ其後十七年十一月下旬保存ノ爲メ宮内省ヨリ營繕アリコレニ依リ天皇ノ御入水ニアラサルヿ明ナリ實ニ千載ノ美事恐多クモ百王綿々タル系統ノ中ニ一缺典トモ謂フヘキハ

同帝水崩云々ノ史傳ニアリ仰キ冀ハ尙ホ精査セラレ　御陵墓御見込地ノ三四字ヲ削リ純然タル　御陵ノ稱ヲ付セラレ然シテ白峰神社ノ先例ヲ以テ神靈還幸ノ一大祭典ヲモ擧行セラレンコトヲ窃ニ冀望スルニナン

因ニ記ス

同帝潛幸ノ傳各所ニアリ攝津國能勢郡出野村、肥後國球摩郡球摩、薩摩國河邊郡硫黃島、土佐國横倉山並鉢ヶ森山大山祇神社、阿波國美馬郡祖谷、播磨國宍粟郡マガリ村、因幡國法美郡岡

益村、豊前國隱箕、肥前國安德村、長門國豊浦郡地吉丸尾山等ニアリ此際精査セラレ何レカ御事跡ノ確タル地ニ　御陵墓ト定メラレンコトヲ

國分六之助

元暦二年四月四日云云追討大將軍義經去夜追飛脚相副書札申云云云云伐取之者云云生取之輩不知其數寶物等御座之由同所申上也

但舊主御事不分明云云

醍醐雜事抄

不知行方入先帝八條院修理大夫經盛内侍所御座神璽同寶劍不見女院二宮

賴朝範賴ニ與フル書

前畧又八島に御座大やけ并に二位殿女房たちなど少もあやまりあしさまなる事なくて向へとり申させたまふべしかくとだにも披露せられば二位殿などは大やけをぐしまいらせて向さまにおはする事もあるらん大方は帝王の御事いまに始ぬ事なれ共木曾はやまの宮鳥羽の四宮討奉せて冥加つきて失にき平家又三條高倉宮討奉て加樣そうせんとする事なりされは能くしたゝめて歟をもらさすして閑に可被沙汰也

原田種直文書　會津保科家家來所持

山崎平次井手庄司差出候事不二別儀一此度之御利運極無覺束種直生涯之浮沉今明ニ有之二位殿
大臣殿心中押量候
幼主爲御報恩其覺悟無他事偏所任尊神之擁護御隱身之秘法不可有怠慢候猶重秋貞詵（詵ノ一字未詳）
可申子息六郎可爲案内者事右樣密之沙汰ニ候恐惶謹言

筑前守種直花押

壽永四年三月廿三日

祝部宮内大夫との

右之書ハ筑前國原田種直之後裔今保科家に仕へ會津に在り原田三郎と云ふ人の家に傳り
担の浦より櫛田宮神主へ送りたる書に而無相違者なり原田は大藏春實の子孫にて天慶中
の勅書も數多有るを近年筑前へ墓祭に下り候節博多の原新五兵衛其末家に而賴入寫取置
候扣也天慶四年春實への　勅書に三前二島と有之
今三州二島と心得たるは誤也

西田直養入水考

安德天皇御入水の事いかにも不審事にて實は御身を隱させたまひしものなるべしいかにとい
ふに御代〻の

天皇無道にわたらせ給ひしも臣下より失ひ奉りし事なしちかくは保元に
崇德天皇御位を爭ひたまひしかとも讃岐に遷幸ましく〳〵しのみにて御命もつゝかなし然れは
よしや源氏の兵共か
玉體に逼り奉るともあらけなく物し奉らさる事は七百年の今にすら辨へ知らるゝ業なれは當
時の人こゝろに心つかさる事やあるへき扨失ひ奉らさる事にこゝろつかはいかてか海に沈め
奉るへきさて彼能勢の古文書は元來疑はしきものなれは知盛卿の二男に御衣をきせ二位尼の
入水ありしといへる事はさる事なりそのことく御身代りをこしらへ海には沈しものなるへし
しかるを敵も御方も是を眞と思ひきわめたれと片言隻語の考證とすへき事なけれは受はりて
一人もいわさりしを建禮門院右京太夫家集に門院入水のさましるせし處に「わた邊黨源吾右
馬亟熊手を以てこれをとり奉る按察局同く存命すたゝし兄　帝のつひに浮御せしめす」今上
是は御存命といふ事の書たるを見てたゝ推量の說にては大に事を誤る事をしり再ひ此事を
論せさりしなりさる此頃ふと小泉保敬に語りしを此御事につき多年おもひよりし事ありて
ものゝふ端にかきつけたるをおくりぬ是を見れは若江長公朝臣の說にある堂上家秘藏の記に
源平合戰の始末くわしくありて主上をはしめ大臣その外の人々遁れ玉へる方々於ほしといふ

ことありてそれより又考説證をあけて論せる玉葉元暦元年四月四日條に義經去る夜進飛脚申侯去三月廿四日午刻長門國團浦合戰す（於海上合戰の云）自午正至晡時云伐取之者云生取之輩不知其數此中前内大臣右衛門督清宗（内府子也）平大納言時忠全眞僧都等爲生虜云々又寶物等御坐之由同所申上也但舊主ノ御事不分明云々

同書同年四月二十二日攝政賀茂諸條ニ舊主二品ノ事心中无哀傷思哉云々トアルハ彼不分明ト云リト二品ノ入水トノ兩條ノ事也

サテ御入水トイフ事ハ範頼義經ノ計ヒニテサスカ御行ヘ失ヒ奉リシナドハ云カタシ御入水ト云タルカ尤知盛卿ノ御末子ヲ帝ニ取カヘ奉リシ説モアレト眞ニ帝ノ御入水アリシ樣ニ思ヘル輩モ有シニヤアラムサテ義經カ合戰ノ記カキテ鎌倉ニ送リシトキ慥ニ御入水トハ披露シタルナルベシ夫ヲ東鑑ニハ記シタルナリ賴朝卿モ此始末カツ〳〵知ラレタルベケレトモ先帝未タ世ニ御坐ストイハンヨリハ御入水アリシトノ沙汰平氏餘黨ノ爲ニモヤスケン夫ハ夫ニシオキ玉ヒシモノナルヘシ又宗家ノ家臣何某カ高松家ノ家臣何某ニ物語リシト云説アリ平家已ニ限リト見エタル時ニ知盛卿ノ子ノ八歳ニナルヲ以テ

帝ト披露シ

帝ハ西國ニ落玉フ是ヲ知盛卿ノ子ト云ヒフラシダルナリサテ知盛卿ノ家子ニ惟宗何某ト云者アリ即宗家ノ一族ニテ宗家ニ養ヒ玉フ今宗家ノ館中ニ御社アリテ御釵ヲ以神體トス云々或人ノモノガタリシ宗家系譜ニ云知盛惟宗元暦元年甲辰三月於長州赤間關平氏亡滅ス知盛亦戰死ス在襁褓之嬰兒也乳父某懷之而遁竄于山林後年太宰少貳藤原能眞執兵馬之權跋扈干九州二島乳父遊事少貳其兒長成後稱右馬助惟信寛元四年丙午伐阿比留家始取對馬國自此以宗爲氏云々ト云フモイデ又藩翰譜ニ云對馬守宗義智ハ太政入道清盛公ノ四男新中納言知盛卿ノ末孫ナリトハシメ知盛卿西海ニテ失セ玉ヒシ時一人ノ孤アリ乳母ノ夫右馬助惟宗ノ某ムツキノウナニカクシテ筑志ノ地ニノカレタリ成長ノ後元服サセ已カ姓ニナシカヘテ宗ノ右馬太郎ト名乘ラス其後北殿ト七人ノ男子彼男宗ノ右馬彌三郎右衛門尉ト寛元四年ニ對馬國ニナシ渡リテ國人阿比留ヲ討テ終ニ當國ノ地頭ト成ト出タリ此等ノ説ヲ以テ見ルニ彼ノ家ノ秘説ト大同小異ナリ然レハ對馬ニ落タル知盛卿ノ末子ト云モノヤガテ安德天皇ノ御事ナレハ疑ベクモナク宗家ハ安德天皇ノ後胤ナリサテカノ右京太夫家集ノ端詞ヲ熟見ルニ一卷ノ文体トハカキサマイタク

異ナリコハ全ク東鑑ノ文ヲ以テ後人ノ裏書セシカ誤ヲ本文ニ入シナルベシ爰ニ東鑑ノ文トテヲシ合テ見ルニ

渡邊黨源吾右馬亟以熊手奉取之按察局同存命ス

先帝終ニ浮御セシメス○○今上是ハ御存命　家集ニ若宮ノ二字オトセリ見トハ今上不令

浮御若宮今上見者御存命云々兄トアル兄弟字ヲ誤テ翻シタルナルヘシ如此ナリ

㐂本ニハ此裏書とおぼしき所なし古本に无もありしか又は纔入ト見て省きたるものか云々以上保敬說也さて此等の說ともを見て始ておのか推量の說もあたりたるやうなりさるを見て此比長津伴雄來りていひけらく昨日大通寺は實寶院にてかの藏の醍醐雜事記をゑしに元曆の比にかきしものにて殊勝いふ斗なしその中にかゝる珍らしき事こそ出けれとて其拔出しけるを示すを見れは元曆二年四月十八日の條にて去二月二十四日於長門國平家與源氏合戰平家被打于源氏大將軍九郎判官義經生取內大臣宗盛右衛門督清宗大納言時忠讃岐中將時實內藏頭二位僧都全眞法勝寺執行能因阿波氏太夫成長藤田左衛門信康女院若宮降人ハ源太夫判官季貞攝津判官盛澄自害中納言知盛能登守教經殺人左馬頭行盛小松少將有盛備中吉備津宮神主權藤內貞綱同舍弟菊地二郎刎頭者百五十人不知行方人ハ　先帝八條院修理太夫經盛內侍所御座進上全寶劍不見女院二宮トアリ是ヲもて見る時は玉葉にしるさせ給ひし事まゝ〳〵たしかにして御入水にあらざる事いよ〳〵なり故に保敬か說に又雜事記を加へて謹て御入水考をつくるさはれこは國家の大體にかゝる事なれは一二の徵を以てさため云へき事ならねば后の識者をまつ

鶴峯戊申史傳摘抄

申嘗聞一說新中納言之子實代　安德帝而入水

帝則遁竄于豐前彥山蓋緒方臼杵二氏之所計也既而帝娶少貳惟宗氏女有數子其第二子爲宗四郎左衛門尉是今對州公始祖也云云々

烏鷺說

宗祖知宗者中納言平知盛第三子小字鬼王丸也以元曆甲辰生於帝都甲辰二月平氏趣西海知盛太政大臣平清盛第三子建禮門院昆弟從之於是携鬼王丸於襁褓之中伴西國戰陣之巷而平氏家臣齊藤兵庫以在於長門州根緒城託鬼王丸於兵庫者乎翌文治元乙巳三月義經攻長門州赤間關城拔之平氏大敗知盛在舟中戴碇於甲上投海而卒猛勇所世知也蓋二位尼者奉供御　安德帝而入水之傳說載國史尙矣嘗聞知盛英傑豪邁而平家武略軍謀將也　幼帝漂泊西海波上危殆在且夕須

非使知盛吾幼子逃根緒城之時大訝之竊按在昔良將英士不一以死潔之當　幼帝沒滅之秋非一朝可決之知將才士豫謀議盡之可不言而知也是時平家一屬逃隱肥後州於山中近歲漸知於其所在至今平氏連綿或若義經走蝦夷秀賴逃薩摩州皆不以死潔之所不貴匹夫之勇也矧扶桑　神系之所係豈可忽之乎嘗吾州有俚傳秘說而傳之草莽野夫口頭未曾有筆之寸簡者恐唯事故重大而無徵證也無其徵證以是事故重大也其傳曰使官女惟宗氏抱　帝於懷襟之中而知盛指揮於惟宗氏曰使　帝佯爲知盛子鬼王丸而在齊藤兵庫於根緒城委以存鬼王丸命可託之兵庫兵庫素知忠勇無雙非可疑惟宗氏以死肯之終逃千根緒城乃城陷兵散俱脫圍匿于山中稍到於筑前蘆屋惟宗氏有艶色乞以爲山鹿藤次侍妾而使鬼王丸得長千藤次家兵庫隨從盡愛育之勞後武藤資賴携之惟宗氏相俱到太宰府則兵庫又從之仕太宰府菅廟祠官家（是時兵庫所得於祠官家有菅家二種之重品齋藤家大珍重爲家寶有故近世失之州人所普知也）相俱愛育鬼王丸之後餘編詳宗氏家譜疑惟宗氏　鳳闕高貴官女而忠貞義才之人乎當不詳其姓名實有故既有　幼帝入水之聞使源氏疑探氷解以遂是謀成矣可知謀議之盡也曰凡無徵者弃不執古之道也唯擧其一而已

清水山麓烏鷺漫書

靈光院殿遺愛錄

或時御足洗たまふ折節小姓衆御足洗盥を持參りけるに菊桐の御紋蒔繪にして有けるを御覽して仰在るは菊桐の紋は　禁裡の御紋にて末々の付へき所にあらすもつとも我家は先祖帝家に出たりといへとも人臣に降る事未久しければは　禁裡の御紋を身に付ること恐れ多し常に家の紋四ッ目結を付度志さし在り然れとも仕來りたる事にて變しかたく我足を洗盥に此紋を付る事物躰なく覺へ侍るまゝ此段家老ともへ申聞よと仰出さる誠に上下の分を思召君上を敬ひ分限をはかり且は花美結搆を好みたまはさる難有御意なり云々

杉村眞顯著

元祿年

宗家御系圖 杉村本

宗家御系圖

壽永帝

諱言仁文治三年四月諡奉稱安德天皇高倉帝之第一子也母建禮門院安元丙午二年ヲ以テ生ル戊戌治承二年三才ニシテ立爲皇太子治承庚子四年二月高倉帝讓位於皇太子安德帝時五歲也夏四月即位於紫震殿

彌次郎左衛門尉重尙公

後任土佐守幼名彌次郎公任左衛門尉後世合稱シテ彌次郎左衛門ト云寛元四丙午爲對馬地頭代兼椽務討阿比留平太郎

宗家御系圖一本

宗家御系圖

壽永帝

諱言仁文治三年四月諡奉稱安德天皇高倉帝之第一子也母建禮門院安元丙申二年ヲ以テ生ル戊戌治承二年三才ニシテ立爲皇太子治承庚子四年五月高倉帝讓位皇太子安德帝時五才ナリ夏四月即位於紫震殿御夫人島津氏ノ女也卒年月日不知○知光寺殿也

彌次郎左衛門尉重尙公

以下略

宗家系圖

宗家系圖

惟宗右馬助

知盛討死之時繦緥之嬰兒也輙乳母宗仿官惟宗抱逃于山中後號北殿

男子七人輜轄豊筑肥壹對爲太宰少貳養子

宗右馬彌次郎左衛門尉

寛元四年追討阿比留以宗爲氏此宗家始也前代桐菊紋自此時家紋四目結蛇目二引兩也

弘仁八年丁酉阿比留氏始治國至在廳平太郎四十二代而四百四十九年也至此隨宗家爲國民也

以下略

貝口村河野系圖序

夫昔壽永之變亂　安德天皇則藐于水沒之容而後以於太宰少貳忠祐選落於筑紫太宰府而後改與惟宗號北殿兮當于時豊前筑前肥前壹岐對馬三國二島之爲輜轄之處其比則對馬國之掾官畔蒜平太郎國時於于是國掾官數代連續也依」之誇于在廳官威喪於國中淫無道也因」茲其弟左馬佐時信數雖加諫更不用之國大背兮於于爰察於其横逆難免之意趣兮是故請於

兵惟宗大君兮大君歐催　隣國於干爰平左衛門尉得於賴使而出於伊豫國往而謁於惟宗君馳
加於其勢兵是時惟宗君於老年其長子彌次郎左衛門尉爲大將從兵都而貳百餘人渡來之時則
河野平左衛門尉爲軍頭于時寛元三起於兵發船筑紫臘月二十九日著船於豆酘浦揚陸于金剛
院而後於于庭前有方違之儀兮明則寛元四丙午年正月元日討入于府中兮先鋒之士俵主稅助
盛次中原狩野助安利阿比留左馬佐時信三年以前渡來而垂於謀略誑惑到于爰之門與貳百餘
士具而於于讒一時誅征於平太郎國時而後國既平均也

貝口村河野家譜

越智氏河野家譜

宗氏號河野平左衛門尉正嘉三巳未年三月十二日卒去

前豫州大府衛越智宗氏入道超應道淸大禪定門于時壽永以後　安德帝則落居　築紫太宰
府御名奉稱與惟宗號北殿當于此時豐筑肥三國二島之爲輦轂之處其頃則對馬國之椽
官畔蒜平太郎國時因惡逆無道其弟左馬佐時信數雖加諫更不用之因茲註進惟宗君矣
君於于爰兵士駈催于隣國矣平左衛門得於賴紙而加其兵矣于時寛元三乙巳年惟宗君長
子彌次郎左衛門督平重尙君爲大將軍討入于對州之時既臘月二十九日夜則去舊向新規
式有方違矣明朝同丙午年正月元日於于一戰擊亡於國時矣兼軍大將矣於棧原首有實撿矣
其後二百餘士有恩賞於干爰仁位郡小綱村賜之云々下略

豐村須川勸十郎所持古書付

宗家のわたる次第

一しんちうなでんとものりは宗はうぐわんただむねのやうしたゝむね右馬助殿これおきた殿
とゆふ御子七人ありたうしまへ御兄弟七人にて御わたりなりあて六人はそしになりたまふ
ことゆらひあり七ばん目の七郎殿すけくにいそしたりといふともちやくし宗彌二郎右衛門
尉殿やうしにてくにのぬしとなりたまふなり　きた殿七人の御子一番宗彌次郎左衛門尉
殿內山なり助くにをやうしとし對馬の守護とさだむ二番宗二郎殿佐護也三番宗三郎殿さす
也四番宗あら四郎殿これはゆぎうねん佛に御たちなりゆへにしそんなししやうたいなき大
力なり五番五郎殿かしなり六番六郎殿くちき也七番目七郎殿助くにこのときよりくにをま
もりたもふ一番なり御子右馬太郎殿二番すけくにの御子宗右馬太郎殿

松尾系圖

松尾系圖　源氏家紋二八

松尾判官太夫

松尾權太夫秀綱

松尾彈正秀元

元暦元年赤間關軍ニ平家亡滅スル時

安德帝ヲ仁位尼御入水ト唱ヘ御衣ヲ水中ニ投ス依テ　帝ハ惟宗判官ト名ヲ改メタマイ所々ニ潛マセ終ニ武藤資賴君ニカクマイタマイ後御長子　重尙公ハ在廳阿比留國時ヲ討亡シテ對州ノ地頭トナリクマイ依テ　判官公ヲ筑前與志井村ヨリ對馬ヱ御迎ノ時太宰府ノ命ニ依テ秀元其外從者守護シ奉リ海人船ヨリ對馬ニ來リ寛元ノ末太宰府ニ歸州ス

松尾次郎左衛門尉秀和

以下略

浦上系圖

浦上系圖

浦上大□正□

正光賴信□□勞上馬介ニソ被成レル御供源次□ヲ初メ御□人等爽ニ出立□八月十一日都ヲ立テ海道ヲ推懸テ彼國ニ□向アリ爰ニ滿仲ノ國臣□部綱ヲ招テ弓ノ道ヲ□□□□ケリ

浦上伊正行

浦上左正和

浦上□□ハ正□

浦上掃部頭正永

初壯馬ト云

對馬國在廳官人阿比留平太郎國時太宰府ノ命ヲ不受爰□其弟阿比留□馬之介時信密ニ九州二島ノ惣大將武藏判官囚無道ノ叛意ヲ內通ス于時寛元三乙巳年惟宗右馬判官公御長子土佐守重尙公ヲ大將トシテ國時ヲ討ント議セラル依テ隣國ノ兵ヲ駈催シ宗徒ノ勇士二百餘人對馬ニ討入其時彦山ノ山伏梅本坊學存ヲ先達トス于時同年十二月發船同二十九日豆酘郡淺藻浦着船同村金剛院ヱ揚陸時ニ御歳向四

ク於爰御迎歳ノ規式アリ同四年正月元日中村里ヱ討入國時不意ヲ討タレアワテ戰フトイヘ𪜈利アラス小浦原ニ退ク宗徒追テ是ヲ山谷ノ間ニテ討亡ス　重尚公國中ヲ巡見シタマイ地頭トナリ給フ

安德帝ハ治承四年即位ニツキタモフ元暦元年三月長州赤間關ノ軍ニ敗シタモフ皆源氏ノ爲ニ亡滅ス時ニ　安德帝入水マシマシタモフトシテ仁位ノ乳母御衣ヲ水中ニ沈メ依テ文治元年長門國赤間關ニ崩シ奉ルトキ知盛三男惟宗右馬判官公ト名ヲ改メタモフ□後帝ノ乳母惟宗平氏ノ侍齋藤爲持其外從者守護シ奉テ長門ヲ逃ル

帝ヲ海ニヲワシメ又筑前國　ムナカタノ地頭串崎志摩守ヘ永ク隱シ奉リ又□鐘崎ノ民屋ニ潛ミ給□又彦山ノ大奥□坊タモフ夫ヨリ武藤筑前守資賴ニ永ク助ケ干時元仁元年筑前賊徒起リ又彦山梅□坊ノ奥ニ逃レタモフ

浦上大和守正忠

寛元ノ末惟宗右馬判官公筑前國ヨシ井ヨリ對州ニ移シ奉ル時串崎氏新宮氏正忠其外從者守護シ奉リ對州ヱ來リタモフ

以下略

串崎氏系圖

串崎氏系圖

串崎志摩守

後大崎氏ト改筑前國宗像ノ郡主也大崎志摩ノ郡司ヲ兼ル

對馬國在廳阿比留平太郎國時ヲ討ントテ兵ヲ催ス惟宗右馬判官公則兵士ヲ隣國ヨリ駈催宗徒ノ勇士二百餘人右馬判官公土佐守重尚大將トシテ對州ヱ討入タモウ時梅本坊學存先達トス時ニ寛元三年臘月發船同二十九日豆酘郷淺藻浦ヱ着船同村金剛院ヱ揚陸同四年午ノ正月元日中村ノ里ニ討入國時戰フトイヘトモ失利小浦□退宗徒□迄□之ヲ山谷ノ間ニテ討亡ス志摩守從者中村ノ里ウナ山ニ居住ス皆姓ヲ大崎トス

治承四年

安德帝即位也元暦元年三月長州赤間關ノ軍ニ敗テ皆源氏ノ爲ニ亡滅スル時

安德帝入水マシマシタマフトテ□テ文治元年長門國赤間關ニ崩ス時ニ知盛ノ三男

惟宗右馬判官公ノ名ヲカリタモウ

帝ノ乳母惟宗氏平氏侍齋藤爲持其外從者長門ヲ逃ル筑前國ムナカタノ地主串崎ニ陰ル又彦山大奥ノ地ニ潜ム又鐘崎ノ民屋ニ隱ル後ヤ武藤筑前守資□ニ永ク被助タマウ時ニ元仁元年筑前ノ賊徒起テ又彦山ノ梅本坊奥ニ逃カレタモウ後

帝惟宗氏トナツケ對馬エ渡ラセタモウ

大崎次郎左衛門尉重光

後ヤ串崎ト改ム筑前ムナカタノ郡主也

惟宗右馬判官公寛永ノ末筑前國與志井村ヨリ御渡海ノ節御供仕對州エ來ル

以下略

大庭系圖

大庭系圖平姓家紋丸ニ楢

大富源六直孝

寛元三年十二月對馬國在廳阿比留國時ヲ討ントテ

帝ノ長子重尚公大將トシテ對馬ニ討入給フ時御供仕豆酘郡淺藻浦着船翌四年正月元日中

村里ニ討入小浦原山谷ノ間ニテ討取ル

大富伊豆直忠

安德帝筑前ムナカタニ潜ミ給フ時父ノ命ニ依テムナカタニト、マリ

帝ニ附隨フ宛元ノ末ヘ與志井ヨリ御渡リノ節對馬ニ來リテ大内ノ御所ニ奉仕ス

以下略

梅本私記

梅本坊行存ハ元來日子國修驗之長本也其實座主也掌日子修驗ノ寶印ノ家ナリ行存博學而有智謀勇名聞四方文治ノ比有平氏之潰鬼王丸其實　安德帝也雖然世之所深秘可欽之至也既入水之砌行存在長州掉小船援

帝追手之難頻至行存張惡魔降伏之神目建幣起艫助危命而竊抱鬼王丸惟宗一家及集諸士隱之坊ノ奥以米穀養其衆漸而逆徒之兵乱鎭奉入赤間城令爲安堵

平山郷左衛門私記

一宗氏之始祖ハ　安德帝之御子右馬介國君也左右衛門討公ハ兄也

帝ハ筑紫ノ吉井ト云所ヨリ當州ニ下給信小所ト唱シ由介國公ハ其所ニ生タマイ筑前ノ内浦

二郎公ヨリ四郎公コレハ庶子家ナリ友宗公假ノ父トシ友盛ハ臣家也

ニ盛長ナリ

帝者當國ノ大内山皇屋ノ地ニ遷居シ後八幡宮之境内天神社ト崇遙拜所トス祭神

帝ト后妃ト尼殿ノ三靈ヲ祭後ニ故在テ大自在菅神ヲ移シ加祭ス當州ノ神秘也是ヿ本州禪ニ

出國分寺開山ノ作ナリ

藤子光傳火中セヨト云リ

柚谷私記

柚谷貳拾六番

聞書集五枚目

一文治八年仁田左衛門太郎ヘ阿比留證茂在判仁田川本方ヘ傳ル知行ニ付テ之事也

安德帝ハムナカタ地主串崎ニ潛又鐘崎之邊ニテ壹岐方ヘ隱ル夫ヨリ彦山ヘ入給フ志摩守神

宮兄弟從ト云々

柚谷三十四番

古實錄秘書

惟宗公御一門爲源氏打玉ふ乳母ト齋藤ト申家臣長門國根緒城より忍出始は博多聖福寺逃居又

筑前ムナカタ地主方ヘ忍し夫より鐘崎の一岐方ヱ隱る又彦山に入玉ふムナカタ地主串崎志摩

ト云々惟宗判官實　天皇御事也

彦山執事答書二通

安德天皇御事蹟於當山舊記及口牌相傳候次第具ニ申出候樣預御尋問普遂吟味候得共年月遼遠

之儀ニ付確證不分明遺憾此事存候尤古來相傳候口牌左ニ及御答候

安德帝御事蹟文治の乱を避させ玉ひて長州檀之浦より弊山ヱ

登御まし〳〵て數年之間被爲

潛候處其後對州ゟ被爲遊

御動座候其時

帝爲御遺物朝衣之錦御禪置被爲遊且奉仕之侍女二洞と申所にて自殺す其肖像今猶相殘年々紅

粉を粧祭來候右口牌相傳候儀に御座候以上

明治三庚午　　英彦山

三月日　　執事

本書ニ申上候

安德天皇對州御動座之砌當山梅本坊供奉渡海仕候趣於弊山專口牌ニ申傳來候以上

庚午三月日

原田家屆書 會津保科家家來所持

先代對馬守春實

朱雀天皇天慶三年庚午月五三日菊花之御章錦之御旗ヲ賜フ小野好古藤原慶幸ト共ニ反賊純友ヲ追討シ博多ノ戰ニ春實慶幸と共ニ先登シテ火ヲ賊船ニ放ケ盡ク是ヲ焚沈ム其功ヲ以テ征西將軍ニ被任筑前國ヲ賜リ太宰府ニ居住ス其後七代岩戸權頭種直ニ至リ源平ノ亂出來

安德天皇京都ヲ落サセラレ九州ニ御下向有テ種直宅所ヲ

皇居トセラル

御禁宿ニツキ御馳走ヲトケ平家ニ隨逐セシメ度々御合戰ニ手ヲクタス平家沒落

主上ハ對州ヱ奉落其後

皇子御二方被爲在

崩御我本國召上ラレ纔ニ同國夜順郡秋月ノ庄ニウツサレ小身ト成リ數代罷過ル云々天正十八年德川初代將軍ヨリ榊原式部大輔康政上州舘林城付拾萬石受領之節厚キ命令ニヨリ原田權左衛門中根善右衛門村上彌右衛門附屬被命右三人之者ヘ知行千石ツヽ被下榊原家ヨリモ夫々知行被宛行代々執政相勤來候處舊政府ヨリ政權返上

王政御一新ニ付榊原政敬ヨリ右三人本領安堵之義奉願候處

願之通リ以御附札被爲

聞召屆追而式部大輔ヱ

御朱印御下渡之節三千石加入可被仰付候間原田以下ヱ分知可遣事

右之通被仰渡候後私共モ土地人民奉還其後更ニ七拾五石ツヽ下賜高田藩大參事拜命昨午年被免本官當時非役家屬引マトメ東京寄住仕申候此段謹而奉申上候誠恐誠惶頓首

八月十九日　　原田孚賀美

豆酘村觀音寺私記

酘豆之內內院村之儀古はありの浦と申候得共上方より王孫何とやら申御人被成御下候時內院と御替被成御住宅被遊候

內院村齋藤申傳書

一當村ヲ內院村と改申候ハ都ヨリ王孫ト申御人躰御渡リマシマスヨリ內院ト御附被遊候事ニ

申傳へ有之候 昔ハアリノ浦又一名卯月浦ト申スヨシ

一内院様御船御附アリシ處ニ瀬二ツアリ其瀬王皇瀬又ハ王子瀬ト云

梅本坊ヨリ聽聞書 但對馬屋大吉ノ答

對州様御元祖様御送り申上候様申聞候ニ付梅本坊ヨリ御先祖様ハ何ト申御方ヲ御送り申上候哉ト相尋申候得ハ夫レハ

安德帝様ト申御方ト申傳少々舊記も有之候様申聞候ニ付持越候哉ト相尋候處大切之書物ニ付持越不申候様返答仕り候様梅本坊ヨリ申聞

鐘崎對馬屋久助書付

對州様の御内梅本様家へ由來の義御尋被成下左ニ御答申上候

私先祖白石兵左衛門と申者對州様御元祖様御送り申上候様申傳へ有之候段無相違相見へ申候尤其　御方は不容易御方之由にて確と　何様と申御方共相分兼申候得共只王孫之御方と申御人之様に承り申候今に對馬屋敷と相唱五六間角の場所有之兵左衛門義は此浦の泉福寺内に墓所有之元々は法應寺之且家と申咄し承申候得共年久敷譯と申其上　御元祖様御送り義は深く秘し申候事の様に承り罷在申候私幼年の比父臺吉へ附添渡海仕候節何角咄も承り申候得共幼年には有之海人の身元にて大切の御義相分兼申候得共御尋に付右之通御答指上申候以上

明治三年三月　　對馬屋　久助　印

鐘崎浦大吉跡久之助ヨリ申上候事

一當浦内に御屋敷跡と唱へ人の住居不仕場所有之候趣亡父より申出居候得共只今にて白石兵左衛門子孫私弟善助と申者居住仕居申候右善助若輩に付私方申上候尤御年貢大豆は年々同人方御役元に上納仕來申候此段申上候以上

明治三年午三月　　久之助　印

對州梅本坊ヨリ對馬屋大吉へ渡ス書付

今度筑前鐘崎對馬屋大吉と申者對馬へ令渡海遂對面候處此者先祖白石兵左衛門と申者寛元年御打入之節召連候四拾余艘之内に罷在諸般船頭をいたし候段其外血脉之義相咄し無相違相聞へ早速回り役人中呼登ニ付役人助八令上府於此方對面申付る尚又爲後證此方方の墨附相望候ニ付左之通相認め大吉へ相渡す

貴殿今度對州ニ渡海在之遂對面先祖無此上悦事候筑前鐘崎之義往古ヶ由緒の次第も有之既ニ寛元年渡海之節四拾余艘召連其内七艘ハ居留り其家ニ于今令連綿居其余艘ハ如鐘崎罷歸り候段此方之舊記ニも相見居白石家の義兼て承り右此節遂對面彌無相違段相聞候此以後子孫ニ至り候而も双方由緒の譯不消失樣可在之候以上

文政十三庚寅年十月廿六日

對州 梅本坊 印

筑前鐘崎
對馬屋
大吉殿

對州樣御元祖樣御送り申上候樣申聞候ニ付梅本坊ヶ御先祖樣ハ何と申御方を御送り申上候哉と相尋申候得は夫れハ

安德帝樣と申御方と申傳少々舊記も有之候樣申聞候ニ付持越し候哉と相尋候處大切之書物ニ付持越し不申候樣返答仕候樣梅本坊ヶ申聞

肥後國五ヶ村ヨリ嚴原藩へ差出ス書付

安德天皇御事蹟爲御吟味御入來被下猶五ヶ村舊記口牌等之義御尋問被下候處舊記之義ハ寛永元年之火災ニて左座家相傳之寶物古書武具等不殘燒失仕申候ニ付何も相傳候品は無御座候平家衰頽之後建長元三月十三日白鳥山へ來り落人と相成夫ヨリ住居仕申候主人ハ對州へ罷渡候樣承り及申候以上

明治三庚午五月朔日

五家庄樅木村
左座勇之助印

葉木村
緒方相模印

椎木村
緒方和泉印

久連子村
緒方眞幸印

仁田尾村
左座愛之助印

對州嚴原藩
國分六之助殿

筑前鐘崎壹岐某書付

四十四代目入江加賀守壹岐ノ直ェ滿鑑

姓氏ノ條古來壹岐ト稱ス壹岐ノ直ヘ眞根子ノ苗裔故壹岐ト稱ス平家沒落ノ節
安德天皇御座在壹岐氏ノ域ニ在リ仍テ避源家ノ疑別ニ入江ト稱ス今時本姓ニ復ス

明治三庚午年四月福岡社務ヨリ神社之事件御尋ニ因リ壹岐貞滿ヨリ御答控文

壹岐ノ直ェ貞滿元祖上八村平原居住ノ比ニヤ傳說　安德天皇西國御播遷既ニ平家長州ヨリ
對馬ノ國ェ落ナラレケル時御入水ト取成シ奉リ實ハ對馬ノ國ェ供奉ノ節壹岐先祖ヘ御便リアリケレハ暫シ御匿シ申セシナリ其故址葛原社今ニ之レ有リ然ルニ時勢己ムヿ無ク夫レヨリ社務疲弊ノ基トナリヌト申傳ヘリ然レモ後世舊記燒失シヌレハ其徵未明

唐坊神七郎國分六之助ヨリ內務省ェ上申書

明治九年六村中彥殿櫻井成能殿對馬國下縣郡久根村ニ在之古來ヨリ
安德天皇山陵ト奉稱候實地御檢查ノ通ニシテ既ニ
山陵ヨリ直經三町位距候地所ニ
皇居跡ト申傳該地內ニ銀山上神社在之神殿ノ內ニ小祠二ツ有之一小祠ハ
祭神安德天皇一小祠ハ祭神室黑神ニシテ昔ヨリ一月七日四月十五日兩度奉祭仕候同村居住舊
神官綱崎管作ヨリ申出候ニ付
天皇神体モ在之候ハヽ拜見仕度相望候處右ノ者ヨリ及返答候次第ハ從前私先祖代々開扉ノ義ハ堅ク禁止仕神社營繕ノ節タリトモ小祠ヲ奉抱遷宮仕候事ニ候得共斯ル御檢查筋ニ付猶又敬
神ノ道ヲ立扉ヲ開キ候處御檢查ニ被及候通リ花形ノ神鏡直徑凡六寸餘ニシテ至極古ク相見古
篆文ニシテ壽永用保ノ銘有之且ツ又下縣嚴原鎭守和多都美神社境內ニ安德天皇ヲ遙拜スル所
有リテ社號天神社ト稱シ該社內ニ安置シタル御木像一驅神鏡一面有之是亦御檢查之通リ古篆
文ニシテ壽永用保ノ銘有之候尤右ノ如ク取調相成候得共他邦ニ於テ確證ノ書類モ有之
御陵御定被爲有永世御祭典御施行被爲遊候ニ至テハ恐悅至極ノ御事ト奉存候自然他所ニモ確
證無之御陵御定難被成義モ候ハヽ前章上申候通リ數百歲ヲ歷年月遼遠ノ義ニテ殊ニ
帝深ク世ヲ被爲潛タル御事ニテ確乎タル載籍無之ハ必然ノ義ト奉存加之下縣嚴原池屋形ニ居
住仕候宗重正先祖宗刑部少輔將盛ノ世享祿元年十月九日夜親族宗盛治ト云者逆心ヲ生シ卒然
放火シ屋形及神社寶藏悉ク燒失致シ其節討死スル者數名宗家ノ臣宗彥九郎吉田彌五郎山下新
七等也力役スルモノ皆宗家ヨリ賞書ノ判ヲ遺シ于今保存スルモノアリ又散逸スルモ有此時ニ
當リ古寶器書籍等全燒亡ニ及ヒ既ニ印鑰等ニ至リ解ケ流レ惜ムベキ事ト古人モ書殘シ候程ノ

義ニテ確證ノ書類無之段ハ明白仕候得ハ猶ホ確證之ヶ無キハ御明瞭給リ度確證ノ一事ヲ以テ

御陵ト御定相成難キハ

朝廷御系圖上ニ關シ不容易御事ト奉存候處方今聖世開化ノ時ニ膺リ伏テ願クハ御明諒被爲在

皇統ノ御闕典ヲ補益シ給ハンヿヲ卑賤ノ臣等奉恐縮候得共先年以來右御用ニ關スル者尚艱難ニ堪ヘス謹テ奉建白候也

明治十一年二月

長崎縣管下對馬國三十二大區一小區居住
士族
國分六之助

内務省
御中

仝三十二大區三小區居住
士族
唐坊神七郎

目錄

一 薩摩國河邊郡硫黄ヶ島
一 土佐國横倉山
并鉢ヶ森山大山祇神社
一 播磨國宍粟郡マガリ村
一 因幡國法美郡岡益村

于時其發端尋者丹波少將成經大僧都法印俊寛平判官入道精康頼入道也入治承二年戊戌二月御社有造立而成勸請處也然從治承二年建仁二年壬戌當廿五年而三種神器及入御從夫奉稱大宮來眞三種大權現啓奉崇硫黄大權現以上啓栄此時寶殿始渡邊綱彦始啓因勅命錄奉蒙勅命謹以假名而錄之倩而爲造立惟以世暫及行季家運終被捨而不用貞能忠言壽永二年癸卯一門悉差寄評議一決定一先可有御開迚落都於諸所不利合戰而讃州於八島壇之浦承處東國軍勢甚大敵由及聞官軍過半因落失如此而者軍不覺可有正利迚諸卿在全儀而元暦二年乙巳三月七日各被進一階諸方手配新大納言知盛被仰付其最審而資盛正三位被任左大將令兼征夷大將軍日州邊可志也筑紫豐州前後也長州邊大將者正四位上中將能宗任征夷將軍賜被爲成資盛令主之八島在陣人々者知盛自主之　行幸供奉輩者正三位內大臣兼行資盛大納言時房中納言經正參議經俊同參議業盛淡路守清房豐前守知邦美作守宗親左大臣辨忠綱藏人左衛門大尉通正佐內侍狹野內侍也侍大將者越中次郎兵衛尉景光上總五郎兵衛尉盛繼日高阿波前司吉房福原相摸守季長後號肥後暫主從三百有餘也筑紫落被相定人々者建總君而　玉躰之御身代奉作之神宮皇后三韓御退治之日御守以神鏡天日太刀奉拜　三種神器進賜也此總君者雖清宗男實者時房娘七歳供奉人々者正二位大納言時忠從三位宰相季房四位左中將清經左衛督國盛丹後守清邦從五位上通衡正五位上左馬頭行盛實後者元暦三年鄙鄙國下向云々又曰建仁三年實否不定正五位下增盛後爲法師從五位上副將軍能宗以爲資盛面像要法似爲征夷將軍被任從三位令司參軍給外白河侍內侍右衛佐局櫛匣內侍也瀨丘難波一類松浦判官重賢海路爲道引都合五百餘人雜兵彼是九百八十餘騎令被案內與役先鋒完　於讃岐國八島壇浦者征夷大將軍新大納言知盛大將軍而諸事最審而主之在陣人々者從一位大政兼行內大臣宗盛公正三位右衛門督清宗正五位上伊賀守知忠從五位上尾張守清貞從四位上四位下也藏人大夫良衡從二位前大納言教盛從五位上能登守教經正三位前參議經盛中納言律師忠快從四位下左少將有盛後鄙鄙國下向有之正五位上丹後守修理大夫忠房皇后宮亮長盛正親町局桐壺內侍式部內侍權典司局壬生內侍右外侍大將者上總七兵衛尉景清福原和泉守盛兼同男新藏人兼國山田判官業光平右衛門尉正綱主馬介業房狩野新藏人行茂味內外樣者共都合於八千九百餘騎被定在陣而良日撰虎卷日取極秘用之元暦二年乙巳三月十五日夜紛被巡腰輿知盛卿名殘奉悋而如此被詠鳧

解志無身獨荷降雨雹積留心於知人最可聞
與聽鳧者皆勸涙被流資盛卿者伯父知盛卿別慕由爲起一世名殘愁歎心而斯計
親父止視志人者心濃解爾无破留彌名殘行幸供我那

與互被袖濡雖然事已定上者遽名殘多侍曳別而發八島陣賜翌十六日豫州高島著御從是用意小
艦乘　寮御船眞中主從三百有餘雜兵彼是一千餘人菊池二郎云國人被召次郎左衛門尉行吉海
路之爲案内軍艤儲七十餘艘無軍陣備兵粮雜具悉積入而謀計之爲用意資盛業盛二卿長安天府勘
地理紛釣船傳津々浦々元暦二年乙巳五月朔日漸薩州之沖硫黄箇島着岸長濱浦于時參議藏人大
夫業盛者地理之圖捕出于視之去治承四年夏丹波少將成經歸洛節唯得土産處畫像不違實艮山岳
高峙堅東丘者婁嵒將備青山審也從北至西南而其像形似臥龍頭者在北其尾者爲似遊坤海
水西者廣野眇々當之爲天府地迚臣等共相議謹而奉賀朝拜于時　主上者自此時御壽算十歳御年船端有
出御海水被降御手御手水座而被開　三種神器之御箱朝賀受賜因茲此浦號御手洗浦亦
曰浦御手洗也從夫陸着御直濱大幕被打資盛始諸臣皆奉賀天氣安靜拜奉休　宸襟然所自何方
來不知黄色蝶多飛集人々奇異爲想處　主上詔座蝶者爲長金蝶舞遊平氏永瑞相永此地止將唯
被休叡慮勅而　龍顔殊潤　三種神器御廟前捧神酒給被仰出　勅宣趣至諸臣軍卒迄屢可安軍勞
旨被資盛仰付因茲時房並經正承其於傳　勅諸軍初而開喜悅眉滿酒食具業伸心中泰平訖未雖
爲御幼君聖恩趣處誰是可仕意背哉迚唯勘涙流而已也如此同從五月三日濱邊陣屋出來撰淨地經
營黑木御殿兩日之間同五日早旦

三種神器供被腰輿洄陣屋之新殿黑木御所　入御座鳧　御移徙賀奉爲形計並菖蒲式有之其後諸
臣差寄而諸方手配被相定也諸士皆申者衣更下旬迄者於八嶋七萬八千餘騎聽歟漸今者三百餘騎
也又彌減少仕哉社　從夫經十八年建仁二年壬戌三月大宮三種神器入御有之于時　主上御寶筭
二十七歳　御坪内四神之簇建立　玉躰自行之賜拜數御式被相濟
御製朝日サス夕日ノ本ノ寶社マコトノ神ノ珍ラナリケル
ト御祈誓在鳧社難有次第也然忝於一天君如此被苦　叡慮御事一門輩從愚慮起事呼々口惜哉
哀ニモ如此ウキフシノカサナレバ泪ノタビノ重盛ゾ思フ經正
元暦二年乙巳自讃八嶋建仁壬戌四月迄蒙勅命有增錄之畢以上啓

奉納使兩人

建仁二年壬戌四月

奉　謹

從三位新大納言時房
正四位上中納言經正

○三所大權現宮鎭座本記

從建仁年中以下　雲隱法皇御一生硫黄權現社例等本緣社家祿口決秘傳神用祭事辨除之子細審

祿而曰元暦二年己五月朔日硫黄島着御座經十八年大宮入御　三種神器及從來眞三種大權現宮
奉稱抑其發端奉申者右元暦二年乙巳三月讃岐國八嶋壇之浦ヲ御沒落ノ時ヨリ事發リヌ元暦二
年乙己三月十三日評議一決終多勢供奉申サルベキト全議セラレケレ共知盛卿資盛卿ト對談ニ
及ビ多勢ニテハ返テ難義ナルベシトテ小勢引別テ奉爲遷幸ベシ迚議定ヌ因茲資盛其儀ニ同申
サレ斯計リ

いかならんむくゐ成かは白雪の我身ひとつになぞ積るらん

ト詠ゼラル用意已ニ備リシカバ同十五日暮方壇之浦ノ陣ヲ發シ未明ニ伊豫國高嶋ニ着テ同十
六日直ニ豫州高嶋ヲ出船シ翌日日州細嶋ト云攸ニ暮方ニ着給ヒ須臾彼所ニ潮掛有ケル也先福
原相模守季長ニ命シ其處ノ音信ヲ聞セラレケル季長手下郎從二十人ヲ隨エ日州小戸亦ハ宇佐
太宰府詣ノ山伏ニ出立テ彼方此方ノ音信ヲ聽セケレ共安堵ノ地モ無殊更八嶋ノ音信ハ彌ナケ
レバ兎角爰カシコニ休ヒシニ同月廿日　主上關ノ戸ニ着御ノ事候トテ豊後豊前ノ者共其催促
ニ隨ヒ方々ヨリ早馬ヲビタヾシク馳集ノ由如此テハ事極リヌ暫クモ休ムベカラズ迚直ニ走歸
リ事ノ子細ヲ詳ニ奏聞シテ從夫順風ヲ得テ三月廿九日暫ク細嶋ノ港ヲ出帆シ侍リケル處ニ
逆風ニ犯レ暫ク四月五日隅州志布志ト云處ノ浦ニ着岸有ケル同八日日モ晴波風靜ナリシカバ

宜方迚トテ纜ヲ解薩摩方迚ト乘出シ侍リケルニ同隅州ノ沖過ル所ニ乾風ニ支ラレテ乘戻シケ
ルニ種子島浦田ト云處ニ着岸シ賜ヒヌカヽリケル處ニ彼島ノ領主ニ大江澄遐ト云仁アリケル
ガ心アル者ニテ能キニイタワリ進ラセ粮米酒肴抔ヲ再三送リシカバ島人ノ哀ニヤサシキ武士カ
ナトテ左衛門大尉通正ニ福原相摸守カ男右馬介季利ヲ以テ鎧一縮安綱ノ太刀一振黄金五千兩
ヲ給リ武藏守被任ケル如此テシカ〳〵ノ事共御賴ミ思召趣ヲ知セケレバ澄遐初テ驚キ誠ニ只
今迚ハ一天ノ君共存シ奉ラス候ヒシゾ八島御在陣トハ承リ候ヒシカ共是迚御遷幸トハ思ノ外
ノ事ニテ候エ如何計御口惜キ事ニ候御圍ヒ進セ度候エ共此島ニモ外ニ某ト日比肩ヲ爭フ淡路
三郎沼津藤太ト申者俱ノ候エハ心ニ任ズ然共粮米抔ノ沙汰ハ御催促ニ隨ヒ奉ルベキ旨領狀ス
依之通正季利モ然ハ行末ヲ宜ク賴申ベキ趣契約有テ立出レハ半途マテ送リ進ラセ互ニ別レヲ
惜ミケルカヽル處ニ日モ速過去程ニ四月十五日相成シカバ未明ニ彼浦ヲ出帆シケルガ嵐精心
ニ任ズ漸隅州ノ浦ニ着シ浦名ヲ問侍シカバ内裏浦ト申也ト答フ其故ヲ尋ルニ是ハ往昔景行天
皇ノ都ヲ被遊候ヒシ舊跡ニテ斯申ス所ト云依之宜地ナルベシト安堵ノ思ヲ成トイエ共資盛時
房經正皆申シケレハ寔ニ此地南開ケ後ハ玄武ノ地ナリト雖モ分内狹ク歔軍後ヨリ攻責カヽル
則ハ凌難シ一向搖害ノ地ニアラシ迚同月十八日彼浦ヲ發シ浦々ヲ傳ヒ廿一日同國大泊ト云浦

ニ着岸仕給ヒヌ然ル處ニ坤風ニサ、エラレ八日逗留座ケルニ内ノ浦ト云處ヨリ此所ニ至リ軍卒共今ハ遣方ナクヤ思ヒケン拔々ニ落失テ船サエマハラニ成ヌト見エシカバ資盛卿菊地二郎行吉ヲ召レ是ヨリ西エ煙立候ハ聞及ブ硫黄ケ島トヤランハ何ニソト問給フ行吉今日ハ宜シカルヘク候ト申スサラバ急ヘシトテ出帆アル　寮ノ御船ヲ眞中ニ諸船外ヲ圍ミ逆風ヲモ不顧櫓械ヲ押立テ一樣ニ安靜ノ地ヲ得ントテ相働ク程ニ元暦二乙巳五月朔日硫黄ケ島長濱ノ浦ニ着岸マシ〳〵ケル如此テ彼地ノ風景ヲ見給フニ山岳ハ岢々ト峙ヶ青野眇々タリ三山ノ虎岳ノ堅メ嶮岨ニ而南ハ朱雀ノ因ヲ開キ西ハ臥龍ノ情ヲ佩タリ資盛時房經正ノ卿然ルベキ地ナランヤト對談有ケレハ業盛ハ治承稔中ニ成經少將ノ歸洛ノ節持參セラレタル繪圖ヲ取出シ如此候エバ天府ノ地ト存候各何レモ如何思召レ候ト申サレケレバ皆一統ニ了狀仕給ヒテ實ニ搖害ノ地ナリ迚皇居ノ地ニ定メラレ朝拜ヲ賀シ奉ル然バ則チ　主上ハ玉躰自ラ船側ニ　出御アッテ海水ニ御手ヲ洗セ給ヒ　三種神器ノ御箱ヲ開カレ安堵ノ　御神拜有ケル社哀ニ覺テ袖ヲ濡サヌハ無リケル是ヨリシテ此浦ヲ御手洗浦トハ申シケル從夫陸ニ船ヲ寄セ大幕打セ俄ニ笘板ヲ持テ而陣屋ヲ出來ヒ陸ニ遷幸ナシ奉ル漸須臾奉休ニ　宸襟龍顔ヲ奉拜美酒嘉肴抔取揃テ着御ヲ賀シ奉リケル然ル處ニ何方ヨリ來ルトモ知ズ黄色ノ蝶多ク飛集ヒヌ人々奇異ノ思ヒヲ成處ニ　主上叡覽座テ蝶ハ長ダリ蝶ノ黄ナル者ハ黄金ノ長ナリ永ク此地ニ遊ブベシトノ　綸命ニテ諸臣軍卒ニ至ル迄屢クノ軍勞ヲ休ンズベキ旨　勅命アリ依之時房經正兩人其例ヲ傳エテ酒肴ヲ給リシカバ諸臣一統ニ聖恩ノ深キ事ヲ喜ビ謠舞フテ是ヲ頂戴ス其日モ暮ケレバ各皇居ヲ守護シ奉リ皆殿守シテ　叡慮ヲ休メ奉ル同五月三日ノ早且ヨリ二百餘人打倚テ手配シ同四日迄ヲ淨地ヲ求メ兩日ノ間ニ黑木ノ御所ヲ經營シ直ニ五月五日辰刻計リニ　三種神器ヲ前ニ立ラレ腰輿ヲ巡ラサレ新殿ノ黑木ノ御所ニ入御成セラレケル斯テ御移徙ノ御賀菖蒲御賀形ノ如ク取繕ヒ暫ク此所ニ安靜ニンテ座ケル然リトイヘ共搖害ノ地ニハ手配ヲ致スベシ迚文治四年戊申資盛ノ本陣ハ西ノ丘ヲ定メ（今ノ城ノ原）其遺跡諸所ニ搖害ヲ備西ノ尾崎ヲ越中次郎兵衛尉ガ出丸ニ成シ（永良部崎ノ城ノ舊跡也）東ノ岳青尾ノ城ハ上總ノ五郎兵衛尉ニ當ラレ島ノ北高丘ノ出丸ハ福原相模守季長父子（今平家ノ城ト云此所ノ城主ト）ニ替々守ルベシトテ全ク手配定リケル

○從元暦二年乙巳島而若宮降誕由緒有容本傳

去ば於嶋も暫しが程は靜謐なりしかば文治三年丁未に狹野の内侍を資盛に給りて妻愛せられけるが建久元年庚戌四月廿三日男子出生す（伊王丸後ハ三位吉資）又建久五年甲寅二男阿丸出生同九年戊午女子出生せられける（後に櫛匣局と申候人なり）斯て月を重ね年を經所に已に十八年に及び建仁二年の春

に至り白籏白印の兵船節々餘多見ゆる事度々あり依之又々謀計を廻らし長年の舊臣は悉く下の嶋々に身を退くへしとて資盛時房經俊景光盛繼ハ鄰鄰國琉球の大島事と定め清房忠綱を益救島今屋久島に作るとと定め宗親通正は黒丘島に居住に定められて手配全く定りければ子や孫に其役を充られ季長季利父子菊池次郎行吉を持て渡海運送の役と定め諸臣皆商人と成て諸方の音信を聞しむへしと成然は内府資盛は君前に參向し奉り奉拜　龍顔手立の謀略細々天聽に達し奉る世悴伊王丸十三歳に候得共家督仕らせ申度旨を奏せられしかは殊に叡感有て良辰を撰み直に元服仰付られ三位中將を給り三位吉資と號しける吉資を執柄として經正卿は師傅の役業盛卿は大力の早わざにておわせしかは御守の役に充らる資盛家臣河波、前司を吉資の後見の役として粮米士卒の差引を相勤さしむそれよりして同三月十三日三種神器權現の大宮に　入御成給ひ大傳事濟てけれは建仁二年四月下旬琉球の鄰鄰國へ身を退んとて互に酒宴を催し別離の情を述られける然る處に資盛一首の歌を詠して叡覽に備へ奉る

名殘ぞといふべの月の影までもいるさの末を經正ぞしると

詠じて奉りけるに參議經正君の御前に畏り奉りてかくばかり

契りをく花のかた見の櫻かなみに成はぞを待もしてまし

と詠じて奉る　主上叡感ましく〳〵て今迄附隨ふ諸卒の勞苦を助くべきの　綸命まし〳〵御暇給り思ひ〳〵に定地にぞ退きけるかゝりしかは御所も次第に寂く成て伺公の者迚は吉資經正業盛の外は右馬介季利を下司に召遣れ佐の内侍一人抔こそ御局の内には參られけるなり　主上は明暮れ閑窓に向せ給ひ御手習を御日くらしとして詩歌の道に叡心を慰められける然るにつれ〳〵の御餘りに元暦の古を思召出され御返古の端に如此遊れける

精才未充春秋　　幼稚雖居聖位　　敢非施德民門

忘然而獨流涙　　八歳西海漂濤　　身南底沒暮雲

水計不還元群　　爲朕雅婦空亡

○ほのかにも照さで暮る入あひに雲隱れにし三日の月哉

といと哀に聞へさせ給ふ比は承元二年戊辰の春の比の事なりとぞ扨又業盛卿同年四月下旬の五日誘ひて資盛の卿琉國へおもむきし日なりとて生年九歳の阿丸を母の狹野内侍と諸共に酒肴など取揃て　叡前に參向せられは寔に　叡慮淺からず始終の御物語まし〳〵てけるが阿丸も早く成長て兄が力共成べしとの綸命なり經正卿申されけるには假令かゝる田舍にこそ生出づるとも父の志を次玉へと敎訓し給ひけるに内侍申されけるは女性の身にて朝夕申聞せ候得

とゝもいまだうつゝのけふかひにて候と申されけるに君も哀れを催ふさせ給ひて

あはれぞとかく墨染の夕より昔くやしき軒の橘

と遊れ宸筆の御短册を阿丸にぞ下されけるが又能次手成迚阿丸に元服被仰付實名を吉廣と給り從五位上權の佐に譜せられけるに内侍申されけるは君恩を蒙り奉る事いくばくの御事にか候はん父資盛罷在候はゝ如何ばかり嬉しく候はんとて涙にむせ返り畏て居られしかば君を始奉り一座の人々皆落涙せぬはなし從夫して權の佐吉廣と召れて奉仕兄に次で相勤めける斯く年も暮行き重る年のあけくれに御心を惱されしかば佐の内侍餘り淋しく御座し候へは吉資が妹を自らが杖に召寄せられたき旨申さるゝに仍て君もやさしく思召汝六十に近く成衰老の身も難義成べしいか樣にも計ふべしとの綸命なれは承元四年庚午六月より奉仕してみぐしをよせ御腰を摩進らせ供御を奉り抔の役にめし遣れける亦建保五年丁丑八月十五夜明月の夜なれどもいまた誰も參向なければ只御一人徒然とまし〳〵て御詠吟有りける

あわれさをくれ松虫に添られて淋き宿に有明の月

と遊れけるをり吉資參りかゝり妻戸越に承り我一門斯ふ忠の事共仕り叡慮をくるしめ奉る事の口惜さよと不忠の一門を恨み泣倒れて居けるを佐の内侍走り出助おこし進らせ互に一門の不覺を悲み給ひけるに君も哀に思召朕がかゝる天運にこそと仰られて吉資が忠心を益叡感有ける此間は經正を師として只詩歌の道に御心を澄し給ひけるが漸恩召替られ櫛匣局を春の比より夜のおとゞにもめさせられけるとかや兎角春秋移安く建保五年も暮六年も押被向（但右建保五年ヨリ承久元年迄三年也去冬出テ歸リシハ承久元ノ彌生ト云）承久元年己卯の彌生の末つかたより菊池二郎を船頭として季利吉廣他行し都の音信を承り奏聞を遂しかば　叡聞有て如此こそ詠せさせ給ふ

いとせめてくるしきそらの雲はれて都の月を見る事も哉

と聞へさせ給ひ御盞杯仰付られ暫く御物語共有けるが其御次手に武術の事共吉廣に仰せ聞されけるなりいつとなく隱形のわざまで御困（ガシナミ）有りけるこそ不思議なれ扨又世の中も騷敷なりから彼者共はかなた此方往來して御用の事共經營ける同年の冬十二月大雪降積りけるに經正業盛吉資佐、内侍狹野、内侍御雪見とて參向せられ志酒嘉肴ども相摸守季長に申付られて徒然の御なぐさみ抔遊されけるがかく御製あり

夢に見し都の雪もかわらねとかくうつもれる身こそつらけれ

正三位吉資　　勅答

夢にだに知らぬ都の雪なから積れる底のくるしとぞ思ふ

と勅答申けるが君に御くるしみを掛奉るをなげきしかは忠情を感し皆涙をぞ流しける如此て一年二歳も過行程に承久三年辛巳六月朔日と申に卒に若宮御誕生ありけるが甚聰明強精の宮にておわしければ君を始め奉り人々いつきかしづき奉る然れは年月を重ね給ふに付け彌そふめいに見へ給ふ吉資經正業盛悦び思ふ處に貞應元年壬午の秋の初めより經正卿例ならす煩ひ給ひ同八月に已に危く見へ給ひしかは主上枕元へ寄せ給ひ末胡の事共　勅問有けるに經正重き枕を揚て　天恩を謝し奉り一門の不忠重盛在世にも候はゝ抔愁歎して一句を進る

一天覆雲闇夜月　　再會不知臨終思

君にけさおく露よりもつらくして消る思ひの身こそつらけれ

と詠して終にむなしく成給ひしかは　主上を始め奉り一座に有合人々只涙にむせかへりてぞ居られける君は益々惜ませ給ひ今迄親共師とも頼み思召つるにいまた六十四歳にて斯まかれる事のうたてさよとて玉体を惱され御涙せきあへず自ら照闇の秘呪を加持まし〳〵て引導遊れけるとぞ有難き事共也從夫して　主上も御心細く成給ひ始終の事共世の有様を聞し召れ徒然の時節より〳〵御影抔勅作有けるとかや誠に　叡慮を極め給ひ貞應二年癸未十二月若宮を吉資が孫に下さるとの勅命有吉資父子恐入君を我子に頂き奉る事天罰の程恐れ至極と奉存候ひらに思召替られさせ給ひ候へと申奉れば哀隔つるにこそと勅諚有りて少し逆鱗の体に見えさせ給へば佐の内侍申されけるは綸言汗の如し　叡心已に定る上は御請の勅答あるべし常々自ら詔を承知仕に御母方の養子として隔心なく父子の縁を結ばしむべしとの綸命なり拾九歳の年より乳を奉り六拾六歳の今日まて玉体に仕へ奉り能　叡心を存じ奉る必御請あるべしと申されける業盛卿申されけるは老臣も壽永二年の春より晝夜御側を離れず勤仕すといへ共只老の身の程經正と見給へ余命の程斗りがたしとしきりに諫めらるゝに仍吉資吉盛父子恐入候得共勅命に隨ひ奉るべしと勅答申されしかは龍顔殊に潤しく綸命ありける君臣の名は有といへとも實は親子の如く思召との綸言にて

このくれやとしのかたみぞあま小船焦る潮の涙に任せて

との御短册を添られ若宮を吉盛が子に下され瑞星の性を給ひける其心は資盛吉資か三位は三台の星に形取日月星の三星を紋所に定め下されける星は影を隠したる像なり後に吉英隆盛親王の事なり丸の中になしけるなり業盛卿綸命を演られけるは彼紋の印は吉資吉盛若宮三世の内大臣の席を下さる印と宜ふ御堅めの爲の御盞ありけるぞと申聞られは伺公の面々是を祝し進らせけるとぞ御讓りの寶物品々有之かくて吉資は年月を經て漸く寛喜三年辛卯の四十二歳の三月君

に奏聞を遂吉盛を家督せしめ諸事を司さとらせ其身は二位禪閤淨西と號し隱居の体にて蟄居し君前の外は他事なし吉盛家督と成てより諸方の掟を定め例を傳へける依之右馬介季利を正使とし菊池行吉が男三郎吉康に日高刑部眞房を以て觸知せ申されけるに郷郷國米石益救より粟米材木七島の五家より麥米（本七嶋也五家ハ日高肥後平田有川新羅資盛時房有盛ノ臣）黑丘島竹の島より麥竹魚肉千鹽種子島より米石材木等大江の澄貞送り祝しける其後寛元元年癸卯五月五日の夜　主上崩御其御遺勅には吉英事は吉盛に賴み置ぬれは聊思事なし只業盛が末胡に云しいさでの中の神しるし八榮瓊（サカニ）の天のみさを日影の御末こそと云し事を心うけれと計宣ひて御隱れまし〳〵ける末胡御製有之御苦敷息の下に（帝實算六十八歳ニテ崩御也于時寛元元年癸卯也五月五日ノ戌刻）

天雲の立覆ふ身と知なから我日の本に照かけもなし

秋草におく露よりもつらくして雲かくれぬる夜半の月哉

と遊れけるなり仍雲隱院と申雲隱天皇と申奉る如此君崩御の後吉盛諸嶋へ崩御の旨を觸しらせ心々に有附あるべしと叡慮の趣を知せけるに皆島々より吊ひ奉る吉盛父子承り御遺勅の旨を相達し行末永くよしみを結び申べき契約して君用の暇をゞ取らせ侍りぬとゞ申傳へける以

因ニ記ス以上記ス處ノ歌故八田知紀ノ言ニ當時ノ句調トハ思ハレス云々或薩摩人ノモノ語リナリ

○生卒年簡覽

（朱）皇后宮亮正三位參議
一中納言經正　平治元年己卯生レ元暦二年ニ島ニ來ルハ二十七歳貞應元年壬午六十四歳ニテ卒ス

（朱）從三位參議
一參議業盛　永暦二年辛己ニ生レ元暦二年乙己島ニ來ル嘉祿二年丙戌イザリ煩ヒ寛喜二年庚寅七十ニシテ卒ス妻ハ芥桐景成カ姉

正二位
一吉資　建久元年庚戌ニ生レ建長二年庚戌ニ卒ス歳七十二歳

（朱）內大臣ノ左大將
一吉廣　建久五年ニ生レ元仁元年紀州富田（トンダ）ヨリ逐電北國長濱祖

（朱）從四位兵衛督
一吉盛　建永元年丙寅生レ元仁元年己未卒ス六十九歳

（朱）從二位左大將
（朱）內大臣

（朱）正二位內大臣
一若宮　隆盛親王俗吉英ト號シ左兵督（本ノマヽ）承久三年辛己誕生正應五年壬辰薨ス壽七十二歳命日三月廿二日養母ハ吉盛ノ室
（朱）靈號若宮權現氏神社小社也

一櫛匣（クシゲン）局　建久九年壬午生レ文永二年乙丑六十八歳ニテ卒ス（朱）（但內大臣資盛女承元四年庚午六月ヨリ奉仕建保元癸酉櫛匣局ト成ル）

一佐ノ內侍　保元三年戊寅生レ天福元年癸己七十六歳ニテ卒ス時忠女經盛室（朱）（但舍兄新大納言時房卿ノ計ヒニテ建仁三年內侍事奏聞ヲ遂經正被嫁仍眞忠ヲ可抽トナリ

一狹野ノ内侍仁安元年丙戌生レ寛元三年乙巳八十一歳ニテ卒ス内大臣資盛ノ室ヲ(但文治三年資盛ニ給仍令嫁)

○社例根元之覺

一鳴物停止之事大歳豐明神事ヨリ正月六日迄謠舞鳴物ヲ止候事ハ於神前七日之間　主上自御慎有之候ニ附被爲停止候行儀

一五月五日ヨリ七月七日迄御神事相濟而鳴物停止之儀者　天皇崩御之刻ミ若宮權現父君ニ御追善有之中陰日被爲相濟候時迄御慎有之候由跡七月七日於神前養父吉盛ヲ以奉幣ノ賀有之候形也依之從夫神樂式候

一月々三齋日者　主上御在世時　三種神器ノ於御廟前自被捧　供御泰平祈給由跡而相慎申候外緣日九日ハ王子權現宮

一七日　九日　十九日　廿九日　卯ノ日

右是ヲ慎ミ來候事ハ古昔　齊明天皇御宇參議春衡卿父君輕ノ右大臣ノ御陵守ニ被留置候侍ル山田藏人ト云者アリ此人後三年ヲ經テ歸リケルニ其後己信洞仁トテ少罪ヲ犯シ流罪如キノ牢人躰ノ者ヲ遣セシガ彼人緣日ヲ建立テ島中安全ヲ祈リシ舊跡ト渡邊源左衞門綱貞ガ傳ト其孫幸大夫綱彦ガ傳置候社例也　尤朔日十九日ハ鎭守藏王權現緣日　廿八日ハ温峯四神　南川原三十三神温峯ヨリ五ケ所一ノ峯二ノ峯煙嶽　七日ハ七社山王見得火山王燒大雷山王荒瀧山王湧出山王大崎山王明火ノ山王山巡山王　九日ハ攝社皇子三神　大谷ノ皇子　小火煙皇子　武火別皇子　廿九日ハ神池大川原但嶽ノ水天風雨水ノ差引ヲ主ル神

右ハ硫黄嶋三嶽藏王權現ノ社例ニテ鎭守ノ緣日也是ハ實ニ霧嶋同躰ノ神明故ト申傳也以上

啓　綱彦傳

一兩所社例同キ事ハ不淨清ノ之式无相違候社地嶽之山中而血灌候者三千度清ノ祓放火之不淨靈山燒候而穢行則ハ右同斷山中社頭而死去シ候者有之則ハ一万二千度御清ノ祓也是唯一神道御定法之通

右以上社例之儀候

○權現宮御紋櫻ニ定事

建仁三年癸亥春二月仍　勅命定之心ヲ日ノ御形トシ側ノ心筋ヲ光ニ擬ヘ外ノ五形ヲ御影ノ十種ニ取ト云々然共

綸命ノ傳

安德帝ノ御製九重の春の夕邊の形見哉櫻ぞ花と知へかり計る

硫黄權現宮ハ櫻ノ御紋所熊野ハ飛鳥故ニ王子權現ハ鳥也

○御寄進物並年簡

權現宮上古ヨリ寶物並ニ正說社記候者天正二年甲戌八月四日御燒亡ニ燒失因茲其无之　高麗陣御歸國之刻長濱七之亟吉延ヲ被ㇾ出ニ　御前召從　中納言樣御鎧（朱一領）御甲（朱一頭）御太刀（朱一振）御金物、御鎧都而八重菊之一色劔之差物大鍬形　龍伯公御打刀一腰　義弘公御冑一羽御鎧一縮其外唐金花瓶一筒獅子香爐一个神倶道具（唐金地）白木丸盆唐燒神酒瓶鉦二个牧司（モクソ）ガ首桶一ケ右之品長濱吉延慶長四年己亥八月歸朝之節被召出　御直ニ御諚意有之而則ヲ吉延　尊命ヲ蒙ル同慶長四年巳亥九月无滯　奉納　御尊命ノ趣　御身代ニ而籠被遊御意也

近年　御奉納　文化六年己巳三月廿三日相勤候

齊宣公（島津家二十六世薩摩守隱名溪山ト號ス）　御筆御短册貳枚（但桐白木箱絹眞田緒付二重箱）

五月雨千田町ノ御詠吟　柳請板（但柳筥ニテ候）

寄雲戀人知レスノ御詠吟

右之外慶長四年ヨリ被仰付置候祭料神樂料遷宮料等御座候以上

○外寄進物　硫黃山ノ初發

一鰐口之銘（但寄進銘也）

奉寄進　御神前　鰐口一具

豐後府中住人山崎傳四郎藤原盛信

于時寛文十二稔壬子四月吉日鑄物師藤原盛道　諸願成就　皆令滿足

右ノ硫黃山之始ヲ申傳處文錄年中種子島ヨリ大形少宛費ケル（セワヒ本ノマヽ）ガ慶長二年丁酉ヨリ御用物ニ成ケル然ㇾ御用場外甚多シ依之豐後府中住人奉願寛文十一年辛亥蒙御免貞享二年丑迄也（十六年ニテ正ハ十五年）今ノ豐後山ニテ賣拵（庄屋ハ兒玉內藏右左門代宮司長濱對馬吉宗）神主職ハ伊豫ノ掾吉義也御上御直山御拂物方

其後元祿二年己巳ヨリ寶永五年戊子迄二十年ノ間也

右者島人共ニ被仰付代米被成下候旨申傳フ社法別ニ存ス但寶永三年乙卯ヨリ御上樣御神樂次手七神樂相勤候

御上樣御直山之節者島中エ被仰付候硫黃代米ノ內ヨリ七神樂被仰付候

○別傳年簡　家祿曰、

●雲隱院言仁帝硫黃權現ト祠崇ノ添エ奉ル事寛元元年癸卯五月崩御（朱但ゴセン山ノ陵）同寛元二年甲辰十二月大晦日豐ノ明ノ之御神事ヨリ　勅作ノ御影ヲ持テ奉崇　御隱居ノ御殿　雲隱ノ法皇ト奉稱以上啓　但左大將吉英自被行之（朱隆盛親王御事也）

●若宮權現崇ノ神由緒年簡之事

二品左大將吉英之靈永仁四年丙申三月廿二日（吉秋吉保）兄弟ニテ奉祠崇大宮ノ後山中ニ祭ル小社氏神社ト云

○硫黄島社記棟札系譜

- 人皇五十代 桓武天皇
  - 平城天皇
  - 嵯峨天皇
  - 淳和天皇
  - 安世親王
  - 葛原親王
    - 高視王
      - 高望王 平ノ元祖
        - 國香 鎮守府將軍
          - 惟衡 上總介
            - 正度
            - 正衡
              - 正盛
                - 忠盛 刑部卿院執柄 內昇殿勅免
                - 惟盛
                - 六代君
                - 資盛 正二位左大將 兼內大臣行席
                - 重盛 內大臣 左大將
                - 清盛 從一位 大政大臣 ※白河院 ※忠盛養子ニ給フ
                - 吉資 正二位左大將後 禪閣淨柄ト云 硫黃島長濱元祖
                - 吉盛 從三位隱岐守 右大將大將軍兼行 後左大將ニ任ス
                - 吉英 雲隱院
                - 吉壽 權大夫
                - 吉繼
                - 盛武 早世 長尼
                - 資國
                - 吉秀 大宮代宮司ノ祖
                - 吉廣
                - 櫛匣局 帝奉仕
                - 吉道
                - 吉秋 秋月
                - 吉益
                - 吉保 淨栖
                - 吉滿
                - 吉宗
                - 吉久
                - 吉近
                - 吉常
                - 吉遠

- 吉薫 走引ノ達者
  - 吉正 文筆達者
    - 吉雪 早世
    - 吉成
    - 吉熊 戊年戊月戊日生ル
      - 吉政 浦月庵 鹿島流兵法ノ達者
        - 政定
        - 吉信
    - 吉盛
  - 吉淨 源太兵衛
- 吉定
  - 吉丸
    - 吉澄
      - 吉清 七郎左衛門 三州味方原ニ叔父與市
      - 吉世
      - 竹島安長中祖 喜三郎
    - 吉景
    - 吉夏
    - 吉公 子孫京山科在ト
- 吉延 長濱中興祖權之丞髭也 初ヲ朝鮮入御供
  - 吉繼 權之丞
    - 吉義 伊豫椽
      - 吉賢 伊豫守
- 吉明 伊豆
  - 吉元 太郎太夫
    - 資榮 初吉春作 權大夫始名
      - 資雄 掃部 蘿月齋
        - 資壽 求馬

○硫黄島權現官御造營ニ付

中納言樣御父子 中納言ハ島津家久ヲ云フ○御父子トハ島津義弘及ヒ家久ヲ云フ 御寄進 御普請年簡始

但慶長三年戊戌十一月順天御船軍南海島合戰南海瀨戸口御凱陣漢南合戰之御誓願長濱吉延

ヱ御褒美共ニ被仰付候別冊ニ有之候于時慶長四年被仰付置同十七年壬子御吟味ノ上御造立

但本者四間四面之神殿神與作

御造營初

一慶長十七年壬子御撿者附遷宮新社司奬束迄被仰付候　長濱權之允吉延

二元和四年戊午御修補右同撿者付　右之權之允吉延

三寛永十八年辛巳御修補御撿者付　長濱權之丞吉次

四寛文二年壬寅御修補右同斷　長濱伊與吉義

五延寶九年辛酉御修補右同斷　但天和元年也　長濱伊與吉賢

六寶永元年甲申御撿者付此度迄ハ表方直附也　長濱伊豆吉明

七度享保二年丁酉此節ヨリ寺社御方へ被召移候ニ付左樣可奉承知旨奉畏候

八度享保十五年庚戌三月御修補　右之　長濱伊豆

九度寛延二年己巳舊替修補拜殿許リ　右之　伊豆

十度寶曆十年修補御見分申出五年目再度願申出明和二年丁酉ヨリ同三年戊戌迄是大破故造替　長濱權太夫

撿者代迄相勤候以上　但本ハ楠道具正身材木候

十一度天明二年壬寅五月御見分ニテ秋迄御撿者付御普請　右同人之　長濱賴母承ル

十二度文化元年甲子御見分被仰付御取次衆樣御書役賦大工御立合同五年戊辰年御修補被仰付　右同人

相濟候　長濱掃部

以上右之通書留社内ニ召籠置候

右之通玄祖父長濱伊豫吉賢書留奉納仕候古册濕ニテ相損申候依之曾祖父長濱伊豆吉明時ヨ

リ此方長濱掃部古帳之儘撰書載奉納仕候以上

文化六年己五月奉納書留

社司　隱居　長濱掃部資雄

○

土佐宮地嚴夫

横倉山陵考

土佐國高岡郡佐川郷別府村に横倉山と稱ふる高山あり古來普く傳へて　安德天皇御潛行の地にして山陵も亦此山上に在と云ふ即ち土陽淵岳志（嚴夫云此書ハ延享丙寅之秋編輯なりたる由其緒言に所見たれは凡百三十年はかり前になれる書なり）に高岡郡佐川郷横倉山を別府と號く嵬峰傑立絶壁疊嶂深樹蒼鬱神秀多靈絶嶺に祠あり奥院と名く山腹に權現の社あり中宮と名く社前に巖穴ありて窟中に刀劒鋒及靈府鎭宅錢數十箇を納む靈府錢は背に十干十二支を畫く大さ四五寸廻りあり或人此靈府を受て脇差の鐔とせり往昔此地にて靈府神を祭る歟季春初秋の間に此山時ありて大に震動を發す響音如炮高知城下へも聞えて乍ち聞者驚ずと云ことなし里人曰權現尤靈驗ありて怒を發すれは山必す鳴ると又曰自古言傳へて此山に金石を伏す金氣抑欝して外へ發せされは則ち震動電の如しと又古老曰壽永元暦の亂平氏の軍艦長門國赤間關に漂ふ文治元年乙巳三月二十四日二位尼公　安德天皇を抱き御劍を提て海に入て沒し給ふと平家物語源平盛衰記及稗官小説に載する所皆如此なるに其實は尼公の謀を以て源氏の兵及ひ世間の人に　天皇入海て崩御し給ふ樣に知しめて潛行供奉して遁れ來て跡を隱し　皇居を此山に占め給ふと今猶土人の詞に御所と稱し御幸路と稱するの地あり平維盛紀州那智山に隱れ源の義經東の蝦夷島に奔れるが如しと云へり又土佐古跡錄（嚴夫云此書は壬生子保と云人の筆記せしものにて其自序に天明三年水無月上旬とあれば凡百年近き前に成たるものなり）に云高岡郡佐川郷横倉山は勝れたる靈地なり下の宮中の宮奥の院三社あり中の宮迄は人常に參詣すれ共奥院へハ年中祭りの日より外は行事ならす此社は　安德天皇を齋き祭ると云ふ奥院三間四方はかり三重に石を築其上に川石の丸さを七ッ八ッ積上あり　安德天皇の山陵と云傳ふ又自然の岩に平家の一門の名字を切付てあり其傍に八十六人の墳墓あり　安德天皇の隨臣なりと云へり　皇居の地に都山鞠杯と言所あり一ッの窟ありて此所に劍一振十二の神鏡其餘九寸廻りに長一尺程の金の筒あり其中に鐔如き錢に十二支を鑄付たる品數々あり此錢は靈府鎭宅神を祭る時に用ゆといふ其筒に壽永三と言文字切付あり又珍寶の中に九穴の蚫あり傳ていふ平清盛入道紀州那智にて得る所の九穴のあはひなりと未其實を知らす此社折々鳴動する事あり横倉の鳴動とて國中に聞えて皆人知る所なりと云ひ又武藤忠左衛門致知が編輯せし南路志に載たる曲青舍雨洗が詣金峯山紀行と題せし書に云窟殿と申奉るは本宮なり谷道を西に下る

こと二十丁餘只疊々たる岩間を下るにやう〳〵草や蔓などを力にとりて其急なる事比すへき所なし向ふは上の黑嶽不動嶽右には下黑嶽合せて三嶽碧天にそびえたちて彼天台の石橋も斯やとはかりあやしまる程なく岩屋殿に至るに御社は本宮の眞下に在まし俗に本宮の於足と云傳ふ屏風を立たるが如くなり三十余尋の岩壁を冠ふりて岩穴の深さ四尋余り横に入る夫より底に入る間數は知れる者なし　安德帝十束の御劍なりと言傳ふるものあり其外種々の寶器拜み奉るに誠にものふりてこそ見え侍れ云々其餘道の邊にも古の八十末社の内なりとて五社大明神一ノ手王三ノ手王焔魔王池の窪處々の小社小堂擧るにいとまあらず其が中にも城戸の内馬せめ塲鞠の塲等の古名あり誠に往昔壽永の亂より平家の人々安穩に終られしと云傳ふるも宜なるかな云々と云ひ又同書の次に載たる岩神中和が横倉山中見聞記錄（嚴夫云此書幷に上の詣金峰山紀行二書共に明和七年庚寅四月土佐國佐川の人片岡守節同光美岩神中和等同山に登りて其見聞せしまゝを筆記せしものにして二書共に凡百十年はかり前に成たる書なり素より前後長文なれとも此考證に要なき所は多く省きて抄出せり但しにいふ中の宮曲青舍雨洗といへるは片岡氏の別稱なるが）の後にあり左右二つゝ佛体なり中一つは束帶の像なり居士冠を着し御衣は萌黃色のはけ殘りたる者なり所々章あれと見へず細工は甚不細工と見えたれ共久しきもの故しかと分らず素より目鼻も分らず下は多く朽たり誠に下の宮は　安德天皇の御陵にして中の宮には御像を留め本宮は御靈なりと云傳るも虛事にはあらじ云々（今案するに世俗に横倉三所權現は即ち熊野三所權現なりと云傳ふるも熊野は平家崇信の神なれば平家の人々勸請せられしならん）とありて又窟殿の所に至り窟殿の社は大さ五尺はかり冠りたる岩の下にあり神体は本宮の如くなるものにて高さ一尺はかり徑りは三寸はかりと見ゆ是には文字なし此蓋は中の宮の如くなる鏡なり寶物數々あり多くは脇差長刀矢の根やうの物なり中にも劍の形並に異形のものは左に記すとてこゝに圖あれとはふく如斯圖を載せ扨其次に右何も表より錆朽たりとあり又土佐雜錄に載たる横倉山傳說と云へる書にも　安德天皇八島乱後本藩韮生郷久保に落給ひ其後本川に御移り又池川に御移り終に佐川別府に御落着其所今に都と申す此處に二三年も御座なされて文治元年三月十五日横倉山に御移り（別府横倉の間五里）正治二年八月九日崩御と申し傳ふ當山本社玉家大神宮と申奉る是也其所神籬瀧本と云御陵は鞠か奈路と云處にあり（本社より數十歩に過ずといふ土人足を入らずと稱し安に至らず）梁謹て按するに文治元年は　天皇御入水の年也文治元年三月十五日横倉に御移と云は此年月初めて土佐國へ御落ありしと云事を誤傳たるものなるべし左なくては段々と御轉移ありて別府に二三年も御座なされ其後横倉山へ御移と云へる說と符合せず予ひと歲登山す山の半腹と覺しき所に中の宮と申すあり伊弉諾尊を祭奉と其社の傍は杉林にして大さ五尋廻に至る木あり天高市杉原中の宮と申嶮嶮を登る事

數十歩にして本社神籬瀧本に至白石磊砢或横或祖尖稜鋒の如く其危嶮なること擧て言かたし其石間一樹木皮白く葉小なるもの數十株瘦骨長幹にして生繁れり其中石最峻嶮にして高突樹頗繁茂して蓊鬱たる處に一少社を安置し奉る即是玉家大神宮也是を奥の院と稱す神主戸を開て神体を拜せしむ即ち一銅器にして天皇御物と云後に圖する所の如し嚴夫云此圖後に因在る所に出す故に爰に畧す社傍左の方巖嶮を踏南方に向ひて下臨すれは數十丈の深谿眩惑して久しく臨み見る事能はず社の右傍障壁の如くなる處樹枝或は樹根に扶けられ下ること三十間ばかりにして左の方彼本社安置せる所より一面の大巖壁中央張出て下は自然に入り淺狹の洞穴となりたる所に一小社を安置す是を岩屋社と稱して天叢雲命劍權現を祭り奉るとぞ此處を十握谷と云古刀劍類數十幷に三の小陶器を社中に納むと雖皆後來寄附せるものなり其内に朽余僅に存せるもの一二あり是彼時の物かと云ふ實に儼然たる靈區目に遮るものの人をして畏縮せしむ此所にて黄昏に至り　御陵鞠か奈路に至ることを得すして下山す中の宮に至る時夜に入松明を點して下り神主小田善太夫か許に宿す嚴夫云此書は古屋梁といふ者の筆記せる書なるが上の安德天皇八島の亂後云々といふより土人足を入らずと稱して妄に至らすと云細注まては本文にして古人の傳說を其儘に記たるものにて梁謹て案するに迄は所謂記者か自ら登山して其直ちに見聞せし所に自らの考をも加へて記たりと見えて一字下けて書たりしが又是より下は本文の如く上て記せり惣て此書には猶此末にも頗る考証になることゝも多かるを其は皆下の因みある所々に引出辨ふべし　神主重代持傳る所の劍鎗の穗の如くして長し幷短刀あり出し見せ〳〵む又此山中盤回して平氏の一族を祭祀する所八十余社あり其記錄神主に需め拔抄して左に出す嚴夫云此は平氏の一族中にて名在し人々八十八人の靈を祀りて之ヲ八十八社と稱する其人々の社號を官姓名等を記したるものなるが其は後に至り云々とあり

此類の傳記猶多かるべし加之此山に近き邑々の古老共傳へて云に古來此山に白籏を持て上れは必す山神大に怒りて荒び給ひ赤旗を上れば大に神慮に適ひて幸福を給ふ又此山中にて謠淨瑠璃は更なり總て源平に關る物語を爲事も大に禁忌にして犯す者は忽ち神威に觸て嚴罰を蒙ると既に先年佐川郷加茂村なる某なるもの中の宮杉原神社修繕の爲め登山し其役に從事したりしが退屈の餘り覺えず源氏平家の御戰に云々と云俗唄を歌ひ出せしかばさしも晴れわたりし一天須臾に搔曇り電光荐りに閃き忽ち大雷鳴轟ろき一陣の風颯と吹來り其修繕に掛り居たりし數名一時に神殿の居根より吹落されしが餘人ハ更に傷みし所もなきに彼始め唄ひし男は消たる如く行方知れず成しかば人皆恐れ迷ひしに其より三日に當れる日の朝方忽然と山の麓に歸り來りしかとも暫らくは物をも辨へず夫より久しく大熱を煩ひしとぞ又此明治六年夏の比高知縣の士族にて佐川に住める某等世に靈異と云事はなきものなりと云より爭端を發き然らば横倉山に上りて八島壇浦の戰の事を物語り試むとて三四名相伴ひ當山に登しが未た半腹

にも至らざるに墨の如き黒雲俄然に群り須臾に天を覆ひ前後も分難きに三寸廻りもあるべき氷雨激しく降來り進退を失ひて大に困難せしが漸くにして少しく靜まりしを幸ひにはふ〳〵の体にて走り歸りしどう此氷雨只此山上のみならず土佐全國に普く降りて田畠に作れるいもの葉など悉く打破られ人普く知る所なり此等を始めとして當山の靈異古今枚舉に遑らず如斯傳說あり靈驗あるを以て世人横倉山と云へば　安德天皇の山陵なりと取極めて心得たるもの多かるを嚴夫常々心飽ず且奇しみ且疑ひて居たりしに其後諸書にて此の　天皇の御落着の事を記したるを見ること少からず中にも文化十四年三月攝州能勢郡野間庄出埜村農民辻勘兵衛と云者の居宅の棟木に竹筒に入て結付在しを見出せしと云ふ左少辨經房卿記と云書には壽永四年乙己三月二十四日二位尼の命に因て典侍大納言局左少辨經房大輔判官種長郡司景家等　安德天皇を小舟に移し奉り潛かに供奉し陸に上り辛くして三月二十八日石見の國をさして官家の公達筑紫詣して歸らせ給ふと僞はり山里を經て御行なし奉り五月十一日伯耆國は小の山里に着せ給ひ夫より五月晦日但馬の國府に着給ひ六月三日攝津國天王と云山里にいらせ給ひ又十五日に能勢の長尻と云所より此野間の郷に渡らせ給ひ爰にて　天皇御腦座まし〻かは此處にて樣々介抱仕へ奉り日を經て七月二日に至り稍やく御腦も常に復し給ひしかど此所よりは都へも二日路神崎大物の浦へも二日路にこえぬ路なり隱れ忍び給ふには所よしと里人共も留め奉るによりて遂に此處に留り給ひ其年の八月末つかた　はた姫の宮を御覽して「冬枯し木々のこの葉も色よきに戀しき君のいつにきまさぬ」と云ふ　御製などありしが其年も暮て翌壽永五年五月十七日終に同所に崩御し給ひ岩崎と云所にいはひ鎭め奉り若宮八幡宮と合せ敬ひ祭りし後經房等御社を放れ奉らむことを心うく思ひ此里に留り小家をしつらひ田かへしの業をいとなみ典侍の局を妻とし長く御社に仕へ奉れるよしを甚委しく書記し其末に建保第五丑年九月二日從四位上侍從行左少辨藤原經房左古麻呂へと書きたるに經實と云より經久と云迄十三代の系圖添て在る其經久の下に天正十五亥四月十八日とあれは其時代に當りて彼竹筒に入れ棟木に結付置きたりしならむと清水濱臣が旅路の打聞と云書に云へり又仙女物語　此書は筑前國遠賀郡の浦人とも伊万里の陶器を船に積て諸國を廻り渡世とする者多き中に天明二年寅の五月奥州津輕に至り舟宿に滯留して銘々日毎に荷をかつき所々在々を賣廻れるに遠賀郡蘆屋の住人稻荷丸と云舟の乘組某なるもの一人或日山路に踏迷ひ吟ひけるに谷川の水にしたがひて野菜の屑の流れ來るを力に溯り尋行けるに數十町にして一人の女房洗濯して居たるに逢ひ終に其女の許にて一夜の宿を乞ひ終夜の物語に能聞ば此女も其本筑前國遠賀郡蘆屋の產にて後同郡床の浦と云所に緣付男子女子も持けるが一年病を煩ひ瘦衰ふるを歎き二人の子供心を盡して介抱する中に或日磯に出て一のはら貝を拾ひ來り進むるに任せて食せしかば是より病も本復し其後病と云事を知らす幾春秋を重ねても老衰の貌もなく夫は素より子供を先だて孫を矢ひ曾孫玄孫も次第にかくなりぬれども唯特り面影かはり衰ることなく幼き時見し水莖の海よ隈々に干潟となり蜑瀨岩瀨などいへる所も皆名のみ殘りて昔の蹟形も見えすありしかばい

つしか住馴し古郷にも住みうく覺ゆるより國々の神社佛閣を拜し廻らんと思ひ起し竟に子孫の
もの又所の人々にも暇を乞ひて先豐前豐後より伊豫に渡り四國を經廻り長門に渡り夫より出雲
伯耆岩見などにも年を經て因幡の國へ行法美郡にて又人の妻となりしが其夫も死すれど更に面
影替らねば人々奇しみ化生の者ならんなど密語くを聞て又奚をも暗に忍び出都の方より吾妻の
國々を經歷り遂に此陸奥の津輕の郡に來りしが人々のすゝめによりて固辭がたく此家のあるじ
に嫁きたり我古郷を出し頃彼法囉の殼を我命の親なりと思へば所の神職に頼みて小き祠の有し
に祝ひ納めて我形見とも見よかしと云殘したりしが其小祠のわたりに舟留の松として大なる木一
本ありしを松は千歳のものなれば若彼の所にいたり給ひなば是をしるしに万が一もわが子孫の
末のものなど候はゞ尋ね出して此物語聞せてよなど種々いと云書に云ふ自らはもと筑前國の
へる儘を聞て書記し之を仙女物語と名げたるものなり

庄の浦といふ所の者に候が不思議にて本國の人に環會も一方ならぬ縁にしなれは今夜は見苦
しくとも草の席に休せ給へ終夜物語申し侍るべしいざゝせ給へと盥をかつぎ先に立て案内し
我家に伴ひけるさのみ住み侘たる体にもあらず亭主は他行にて男女二三人もありてしたゝめ
など取まがひいかにも草臥給ふらむいざ休らひ給へされど故郷の親兄弟にも逢し心にも候得
ば夜と共に御物語申侍るべし甚怪しくもおぼすべけれど御國へのみやげとも思ひ給ふべしと
て燈火かかげ枕さし寄せて語りけるは抑わはらは山鹿の傍庄の浦（山鹿より十六丁斗）と云へる所の賤し
き海士の子にて候ひしが其頃庄の浦は山鹿刑部亟と申殿の領地なりしに壽永とかや申年の頃
安德天皇と申奉りし帝都を落させ給ひ西海に漂泊まし〳〵刑部殿を頼み給ひて山鹿の東な
る山奥に假の　皇居を搆へおはしませし時はわれもかづきの海士の手馴し業なれば磯の物

など取て御所にも折々さゝげはへりし也云々とあり此外兼葭堂雜錄に諸書に載するところの
安德天皇の御舊跡といへる處左にしるすとて波阿祖谷の奥木屋平劔權現（安德天皇御出家にて此所にまし〳〵
ける故に後に御髮と御懷劔を祭れりといふ）豐前かくれ簑の里　安德庵（此所にて御落飾ありて四十余歳までましませしと云）肥後神璽寺（地名欠）開
山神璽和尚は安德天皇なりといふ　仝國五箇山（此地の氏神は安德天皇にして神体は寶劔なりと云尤一村皆平家の落人の末葉なりとぞ）日向院社院塚（安德帝の
御廟并御陵なりといふ）因幡安德寺（地名欠）一門皆こゝに世を終りしと云對馬（世に普く言傳ふる處なり畧す）右六ケ國皆いつれも　安德帝の
忍ばせ給ひし舊跡といふとあり此頃嚴夫聞傳ふるに彼長門國豐浦郡下の關阿彌陀堂又薩摩國
硫黄島にも此　天皇の御舊跡と申傳ふる所ありといふ又此頃阿波國美馬郡東祖谷山栗枝渡（グルスト）名
鎭坐八幡神社の神由と云書を見たるに壽永年暦の乱に依り中納言敎盛二男越後守平國盛密々
安德天皇を讃海より守護し祖谷山栗枝渡名に奉遷後に　崩御坐まし給ひ帝体置所なく（嚴夫云實
に恐支申す事なれども元のまゝを記し奉れり）恐れ多くも灰燼に奉行御骨を此御社に奉納則社内に御火葬場あり誰か
之を恐れざる者なし八幡神社と稱し祖山は固より他人も厚く仰き信する所年古の顯實にて從
來敬信仕候然るに星移り寛保年暦社殿燒失すと雖も御骨は炎上に消給はず後の難を恐れて右
御骨は西祖谷山末重名八幡神社に奉遷現今も奉祭する由を記し又其社圖にも　帝の御火葬場
と云ものを載せたり凡二間四方の圓形なるものあり中に古石三ッあり諸人恐れて近よらず又

此内には草不生御火葬場と唱へ來る由に記せり是も異なる傳へなり

又下の宮と稱す當社は南社北社とありて南社には藏王權現鎭坐高倉院天皇の御勸請也又北社には天照皇大神大日已貴二柱神月讀尊を齋奉る天文十五年午八月鎭祭せし由に傳へたり又半腹の所に神社あり天高市杉原神社と云又中宮と稱す伊弉諾命伊弉册命天照大神熊野權現八幡大神又藏王權現を合せ祭り十二社大權現と稱し奉る由也又最高絶頂の所に神社あり即御嶽神社にして奥の院と云ひ又本宮と稱す往古は玉家大神宮と崇め奉りしとぞ此所を神籬瀧と云て即ち　安德天皇を齋奉ると云へり然るに曲靑舍兩洗が紀行岩神中和か見聞記錄及ひ梁か傳說等ハ皆親しく登山して其實地に就て見聞せし儘の記錄なるが中宮と本宮との事は委しく記して下宮の事は記さす此は其所在の地の勢にて越知の方より上りても楠神の方より上りても下の宮の方へ廻りては道路頗る不便利なるが上に又下の宮にはさのみ　天皇御舊跡の據處とすへき事もなく且詣金峯山紀行に同士二三子と三ッ尾の渡頭より引舟に打乘りなかれに遡るに下の兩社藥師如來横倉寺高賀茂大明神一の午王等は常に詣なれし所なれは等閑に見やりてこき行ぬとあれは佐川邊の人々は下宮まては屢々詣てし事と聞えたり（嚴夫云彼岩神中和が横倉山中見聞記錄に下の宮は　安德天皇の御陵にして中の宮には御像を留め本宮は御靈屋と云ふ傳なるも虛事あらじ云々とあるは甚た委しからす且傳聞の誤あり如何となれは御陵は横倉山傳說に載たる如く本宮より數十歩と云へれど數十歩には非ず凡そ二丁斗の北に距れたる勒か奈呂と稱ふる所に在れば なり因に云古跡錄に奥院三間斗三重に石を築き其上に川石の丸を七ッ八ッ積上あり　安德天皇の山陵と云傳ふとあるは奥院を直に山陵と心得たる說なれど是も事實に違へり山陵は二丁斗北に離れて在るをや委しくは下の山陵の所に云べし）既に昨年嚴夫登山せし時も始め越知村の方より上りしが凡一里餘にして中宮杉原神社に至る（此時も下宮へは詣てす直ちに中宮へ上れり其凡五丁はかり下より實に直立ともいふべき其石壇の高く壘ること幾百段なるを知らず此邊よりは幾百年をか經たると思ふ杉の大木森々と生茂りて聊も蒼天を見ず其凡三丁斗も上りたる所に御手洗と稱して谿間より淸泉の涌出す所あり參拜の人々皆此處にて口漱手水して坂路を上る扨中宮に至れは彼の紀行に宮のあたりは杉の木夥しく生ひ並へりいにしへ牧君の御舟に作りし木の切株の朽殘りたるものとて徑二間余なる中に小社あり（嚴夫云此木の切株今在しが心付さりき）今はさはかりの大杉なしと雖も大なるもの二本あり周回四圍に余れり二圍以下の樹は數ふるに遑あらず此邊谷深くして物音木魂に響て怪し云々片岡君の奉納平家更隱處今猶紫雲生陰暗深樹裏只聞猿一聲とあるか如く當時に至りては平日と雖も此神社參拜の人の登山する事とはなりたれと今より百年あまりの昔明和の頃は左もありしならん況や七百年の疇昔は實に人蹟絶たる幽闇の高山なりし事云ふもきらなり嚴夫登山せし日は其日より三日間當山年中の大祭日にて祠官織田眞吉を始め近鄕の神官及ひ信仰の徒夥しく參集して居たりしかは即ち織田眞吉

等を案内者として　天皇の御遺跡の所々を其實地に就て檢査し奉るに先中宮より本宮までの間凡七丁余り（横倉山傳説には杉原中宮より嶮崎を登る事數十歩にして本社神籬瀧本にに至る云々と在れと實地に就て見るに誤りなり見聞記錄幷に紀行おとに記したる如く誠に五丁余りあり）其間の邊旁幷に本宮の彼方此方に今も猶行在所供御水鞠か奈路馬攻場十握谷城戸口等の古跡夫々其地名に殘りたり中にも行在蹟と云は中宮より凡四丁半余り上れる左側の深林の中にあり織田直吉か集記せる確證記と號たる書に縦申より寅へ二十五間横己より寅の方へ十三間半平坦に堀開きし物にして行宮ありし處と往古より相傳ふるなりと記したるが今嚴夫が實見せし處は平坦とはいへと水平と云ほとにはあらす唯峽谿高卑交峻嶮なる深林の中に怪くも平坦にして其平なるや何にも人工によりし狀に見なさるゝは誠に古傳の如く行在所の跡ならむ

又供御水蹟と云は是も確證記に行在所を東南へ距るゝ凡一丁余り（嚴夫が實見せしには凡二丁斗も在るへしと思ひしゆゑ樹に奉れる略記には二丁斗にしてと記したりしを後に確證記を見れは一丁余りとあり此方正しからむと思へは今は是に因れり）此水山上にありて甚た清淨なり谷の頭へ石を積みて水を畜ふ往古泉の傍らに杉の大樹あり其根に高一尺斗の壺の如き者あり其製ハ銅か鐵かを分かず又何に用ひしかと言事を知らず近來に至りて此所在を失ふと記したるが此壺の事岩神中和が見聞記錄に御盥本宮より二丁斗り下にあり四尺斗の池なり其脇に杉の木あり其木の本に壺あり甚苔むしたり（壺の圖略之）高サ八寸斗り太き所指渡し五寸斗何金と云ふことを知らず近年大平村の者此壺を取歸り大に震動したりとて持來れりと山守語れる由記したれハ此壺必ず明和の頃までは存在せしが其頃既に是を取歸りし者もありしに始には取得ず持來りしを遂には失たりと見えて今はあらす今又嚴夫か實見せし所も實に此山の行在所は必ず此水を心當に設けたる者ならむと思はる是より本宮に至るに見聞記錄に馬の骨石の疊々と重りたる事二十間斗崔嵬たり其半腹に本宮の社あり云々と言ひ又傳説にも本社神籬瀧本に至るに白石磊砢或横或祖尖稜鋒の如く其危峻なるを擧て言難し云々其内石最峻險にして高突樹頗る繁茂して蓊鬱たる處に一小社を安置し奉る即ち是玉家大神宮也云々と言ひ又紀行にも御社は疊々たる岩壁の半腹に立せ給ひあたりは種々の古木生茂り只寂寞として其ものすごき孰れの靈場何處の深山か是に比せんや云々と云へるに少しも違はす實は言語筆端の絶て及ふましき所謂仙界とも云へき靈場の岩の中腹に凡一丈四方平坦なる所ありて其所に凡そ四尺四面斗の小社を安置し其近邊には諸方の信者が報賽のため奉れりと云ふ一尺はかりの赤織の小幟幾千万と云を知らず建連ねたり是即ち上に屢云へる御嶽神社又奥の院とも本宮とも稱し奉れる　安德天皇の鎭り給ふ御本社に座ます覺へす落涙して伏拜み奉りぬ爰に於て諸書の

傳記をくり返して考ふるに見聞錄の本宮の所に爰にも限らず神体に近る時は山守榊の葉を吳れ口にくはへさするなり神体は唐金の鉢也（慥に唐金と見えず）形左之通り（圖略）高一尺余指渡シ六寸余苧桶ノ如ク成物ニテ足アリ蓋八角鏡の如く成物也鉢に文字あり堀上け也（文体略ス）

右四行向ふに見えたり段々後ろに廻ると見えたり此文字頻りに見たかりし故に神体を明りへ取出きんと言しに山守得心せす是は遷宮の時ならては動かす事ならず夫とても蓋明る事ならすと云し由を書記し又横倉山傳記にも本宮を拜する所に神主戸を開て神体を拜せしむ即ち一銅器にして（天皇御物と云）後に圖する處の如し云々と有て其末に至り本社所納祭銅器圖とて（銅器ノ略圖）如此圖を出し其下に梁言フ神主戸開て拜せしむと雖も暫時の間且恐れ憚て摸謄する事能はす石頭に跪て大概を圖する而已欵文元讀み辨する事を得すして其形を臨寫すれは眞を失ふ事知るべしこれ恕せよと記したるが今にも此神体を崇め奉る銅器は此本社に納り在るか否やと尋ければ祠官答けらく誠に如斯御物往古より正しく當本宮の御神体と齋奉り來りしが近來に至り遂に御行方知れず成給へり誠に殘念多き御事にこそ然は在れと其末だ紛失給はさりし間に摺寫し奉れる御圖あり其が我家に秘藏奉りて在れは歸宅の上見せ參らすへしといふ故然れは歸りて拜見すべしとて夫より案内に任せ本宮の左の方より岩の狹間を傳ひて登るに

徑道あり行て凡十二三間にして本宮の眞後なる絶頂に至る素より此邊一面の大岩石なり（石質は所謂内裏石にして俗に色白き故に白目石と云ひ又其質の馬骨に似たるを以て馬の骨石共又石灰に燒石なる故石灰石とも稱す此石に限り必ず如此大なるあり又能洞穴ありて其穴の深サ何斗と云を知さるもの土佐國には最も多し其奥には必鐘乳石を生してあるものなり）此巖石は斯る高山の絶頂より又更に突立せるなれは此項上より遙に東南に向ふに是も紀行に本宮の後なる巖壁をよちて十四間斗にして頂上に登り高知の城は更なり東西の御崎を眼下に見下し其外惣て國中の三分二を一眼前に眺望す其尊きことしるすに詞なしと言へるが如し又此嶽に並ひて東なる峯を下黑岳と云ひ西なる峰を上黑岳と云ひ南の峯をは不動嶽と云ふ皆々同しくそひえたり又此絶頂より直下を見下せは幾百丈とも云べき岩壁恰も屏風の如く直立し何なる勇者も一時目の舞を恐るゝ斗なり然るに其項より凡二十間餘も下りたる所に凡そ五六間斗に見ゆる岩棚の如くに突出せり其邊迄行通ふ人は甚た稀なりと言へり又谿間千仞の松柏も只足下の雲中に森々たり爰にて暫らく所々を眺望し夫より引返して本の道を下り本宮の左側の所より凡二十間斗り下りたる所より左に廻りて本宮御鎭坐の大岩の右側の谷道を下る（是は崛殿へ下る道なり其嶮しきことは見聞錄に爰は馬の骨石斗にあらず其間土もあり一ト抱ひ程の石只並ひて有る故先へ下たるは後下るものゝ石を踏落すの氣遣ありて本宮の頂上よりも猶危き心地するあり殊に急なる坂故あまりのことゝ思ひ見返りて我身は眞直に立て扇を當てくらぶるに扇前の土へつかつかへたり其難所なりと記したるにても其嶮岨なるを思ふべし）極めて險難なる所を片手は木根岸角に取付片手にては枝

にて助を取り漸くにして凡一丁半斗り下れは即ち岩屋殿に至る此所は傳説に本社の右傍障壁の如くなる所を樹枝樹根に扶けられ下ること三十間（嚴夫云三十間に止らす凡一丁半斗もあらんと思ふ）にして左の方彼本社安置せる所より一面の大岳壁中央張出て下は自然に内に入りて淺狹の洞穴となりたる處に一小社を安置す是を岩屋社と稱して天叢雲命劍權現を祭奉る云々と云へる如く岩の自然に冠たる下に凡五尺斗の社を安置せり此社の事は兼てより彼寶劍の納まり坐さむと思ひよりたる御社なりけれは殊更に伏拜み奉りて扨段々上に述たる諸書の趣を以て彼寶劍と申し奉る御劍は今も當社に鎭まり御坐やと尋ねけれは祠官答ける〻は其寶劍は往古より彼當社に鎭め奉りて御在しを何時の頃誰か所爲とも相分らす此岩屋神社より取出し奉り御本宮の後なる彼の大岩石の頂上より二十間余り下りたる棚の如く突出たる岩の根の所に立掛ありしを我々の先代なる小田泰盛と云けるが雨氣の爲に錆朽りて其正体の滅せんことを恐れ私宅へ取下け家の神床に鎭め奉りてありといふ（嚴夫は正しく如斯聞たりし故嚮に略記を奉れる時も其儘を記して奉りしが其時共に聞し中に然にあらす矢張此岩屋神社にありて錆朽ひることを恐れ此崖殿より直に取下たる由に聞たりと云ふ何か是ならむなは祠官に正さむとす）又其寶劍を納め奉りて在りしを以て祭神を天叢雲命と申し劍權現とも劍將軍とも稱奉り又此大谷を十握谷と稱するも全く是より起れる由緒なと委細かに答へぬ扨此處より半町斗下りたる所に又大なる岩穴あり是即ち本宮の眞下に當る所にありて是も見聞記錄に岩穴横に行事三間余り夫より下へ穴あり横に行内幅一間斗高三寸高其間中に火鉢の足のしかみの如くなるものあり本宮の御足と云即ち本宮の眞下に當れり其處にては穴の高一ヵ尺五六寸斗もあれ共穴口低き故這入事能はす又其處に下り穴あり石なと投込めは鳴響きて下に落る音暫らく止ず古錢なと拾ふ所も此處なり余程尋ね見たれたも得見當らず云々とあり（紀行に岩屋殿に至るに御社は本宮の眞下にましまし俗に本宮の御足と言傳ふ屏風を立たるが如くなり卅余尋の岩壁を被りて岩穴の深き四尋余り横に入る夫より底に入る間數は知れるものなし云々と云ひて岩屋殿と岩穴とを相混して記したるは委しからす其實地に就て見れは岩屋殿の所在は此記の如く岩壁を被りたる所に在れと本宮の眞下にはあらす岩穴は是より猶半丁斗も下にありて即ち本宮の眞下に當る此所より又見聞記錄に岩穴の事を横に行事三間余り夫より下へ穴あり横に行内巾一間斗高さ三寸斗と云へるは實景に違へり）然るに實地を見るに此に違へり此岩穴は其口甚た太くして二三間は三四人相伴ひても入らるべし夫より奥は猶入らるべく見ゆれと甚暗く燈火の用意なくては入りかたし此處より下を見上くるに大岩直立にして遙に彼棚の如く突出たる岩の裡を見るに正しく板の如くにみゆ扨是より本の道を歸りて又本宮の傍に出て夫より案内に任せ峯つたひにて西北に行くこと凡二丁ばかり此道はさしたる難所にあらす夫より又十間斗り傍に入込めは一段高くして余程廣く平坦なる所あり是を鞠が奈呂といふ此所は　天皇鞠の御遊在らせ給ひし所と云傳ふ（此鞠が奈呂の事古跡錄には　皇居の地都山鞠杯と云所あり云々と云又見聞錄には鞠の場中宮本宮へ往來の間にありと朱にて書加へあり思ふに岩神中和片岡守節等も此鞠か奈呂へは行ざりしと見なたり其

は兩書共に惣て此事を載さるにて知られたり又古屋梁か横倉傳說には御陵は鞠か奈呂と云處にあり云々土人是を入ずと稱して妄りに至らすとあるを思ふに明和の頃までは此には決して人の往ざりし所ならむが又古屋梁も岩尾神社の事を記して實に儼然たる異區目に遮るもの人をして畏縮せしむ此所にて黄昏に至り御陵鞠ゥ奈路に至る事を得すして下山す云々と記したれは梁も彼岩穴の所及ひ鞠が奈呂にも至らさりし趣なり　其所に凡そ一丈四面半なる堆所あり是即ち　天皇の御陵なりと稱し奉る四方に石を築廻らしたるが今は深く苔むし其四隅の石のみ纔に見えたる斗にて如何にも神さひ坐ませり嚴夫始には然のみの感覺も起らざりしが　其は預て大和河内和泉などの諸國なる彼　仁德天皇の大山陵を始め奉り歷朝の山陵を拜み奉りて在りしかは山陵とし云へは皆凡同し狀の御陵と思ひ來りて在りし心にて拜見せしかは少か疑念の起りて實に御陵ならむには如斯御假初の事はあらしと卒忽にも思ひ來りしが猶深く考ふるに如何にも世を憚り給ひ纔の人々を供し給ふ忍々の行在所に崩御し給ふ傳記口碑且山上總ての御實跡等を參考し奉れは爭が嚴重なる御陵營み仕へ奉る際あらむや然るを嚴重に仕へ奉りて在らは却て後人の擬營し奉れるならむとの疑もあるべきを如斯御假初の儘なるは少かも疑念を起すまじき正しき御陵なりとは思ひ定め奉れり扨斯く思ひ定め奉りては疇昔の御有形に依て當昔の御景況を想像し奉り落淚禁し難く伏拜み奉れり又其御側ら五間十間或は二十間許も距れて所々に塚の如く見ゆるものあり或は土のみにて埋み納めたるあり或は石を築廻したる上に深く木葉散しき苔むしたる狀に見ゆるあり如斯物は十五六所あり　又此所より凡七八町北方なる行在所跡と云所より供御水跡と云所に至迄は一丁余りあり其間にも同し狀にみゆる者五六所あり　窃に按るに是は必す供奉の人々の墓所或は其身付の物等納め奉る所ならむ扨夫より又案内に任せて峯にそひて行く事十丁余にして黑瀧と云に至る此所は凡十余丈直立の巖に鐵のくさりを掛あり即ち是に取すがりて下に下るに其所に二間ばかりの猶豫の地ありて又二耶はかりのくさりあり是を取て上に上る夫より木根岩角を力にし四五間はかり登れは其上に凡三丈はかりの岩ありて爰に四尺はかりの神社を安置す當社には住吉大神の御鎭坐なり　横倉寺の節は此社に不動を合せ祭りて在りし故此峯を不動が嶽とも稱へたりとそ　又花山院中納言兼政を合せ奉ると云へり此所は御嶽の項上よりは少し卑く思へど南海に向ひて其眺望は殊勝なることは是亦無比の絶景なり玆にて最旱黄昏近くなりしかは是より引返して其夜は社務所にて一泊せり　（大尾）

右大八洲雜誌ヨリ拔萃

○鉢ヶ森山大山祇神社緣由

古老ノ口碑

勸請年月不詳

安德帝阿波國ヨリ當國香美郡韮生郷久保村字（西グマ）ヘ落ヶ給ヒ夫ヨリ槇ノ山郷所々ニ行宮ヲ占メ給ヒ后ヶ又當郷御在所（一ニ御宰相ト云フ）ニ住ミ給ヒ最後山嶺ヲツタヒ川之内村ノアル山ニ越シ給フ折リ谷ニ阻マレ爲サンスベナキキ御供ノ方々谷ニ橋掛ケ越シ給フニヨリ其山ヲ號テ橋ケ谷山ト呼ブト其ヨリ同村松尾山ニ住ミ給ヒシガ中々ノ深山ニシテ山ノ主ト呼フ物アリ妖怪變

化ノ〻アリシヨリ此ノ山項ニ持セ玉フ所ノ兜ノ御鉢ヲ埋メ則山祇命草野姫命ヲ奉祝シ玉ヒ朝夕拜ミ玉フニヨリ其后化性ノ事ナカリシヲ以テ長ク此地ニ住ミ玉フ即チ今ノ(宮ノ奈路)字ノ所ナリ此地ハ凡ソ東西八丁南北一丁半位ノ平地山腹ニアリ又「コトビト」ノ御釣井ト云フ水山中ノ岩石間ヨリ涌出ス昔ノ供御ノ御泉ナリ今此地ノ作人且ツ旅人ノ飲料トス如何ナル旱魃ニモ涸レズ又帝神祖ノ御靈ヲ向ヒ山ニ祭リ玉ヒシトナリ今字「聖」ト云フ宮蹟ヲ杣人山作人祀レリ御在所ノ東ヲ字「百人御塲」ト云フ言傳フ百官達ノ役塲跡ナリト又門脇四位重忠或ハ盛國トモ ト云フ人敦盛ノ子ナルヨシ御在所ノ西ニ住ミタリト今此地ヲ字「シイノタキ」ト云フ其後胤ハ河野村住現在門脇盛永ノ家ナリ家ニ矢ノ根一本系圖箱ト云フ煤ケシモノニ入リテ今ニアリ其后年月ヲ經テ帝ハ此地ニテ崩シ給ヒ御陵ハ字「宮ノ奈路」ノ西ノ方ニ築キシト今ノ若宮之レナリ此地ハ大ナル岩アリ高サ四間余横幅三間余南面自ラ屈ヲナス其窟前ニ大ナル杉ノ木アリ回リ凡七尋余アリシガ去ル明治七年持主賣却シテ伐木シヌ此杉往古ヨリ「コトビト」ノ墓標ト云フ此岩昔ヨリ樵夫ナド蹈ムトキハ祟リヲナス故近年小キ祠ヲ安置シ若宮ヲ稱ヘ奉祀ス

帝ニハ此地ニテ御子在座ヌルガ此御子此地ニ住セ玉フヲ愁ヒ給ヒ川ニ添テ下流ニ住マセ給フ其地ハ今ノ日野御子村ナリト土俗天子ヲ日ヒ輪ト云フヨリ御子ヲ日ノ御子ト唱ナヘ終ニ村ノ名トハナレルトソ 此御子ノ譯ハ略ス此時

附々ノ方方モ郷中所所ニ住ミシナリト又此山ヲ鉢ケ森ト呼ブハ右御兜ノ鉢ヲ藏メ給フ縁ニヨリ呼ブトナン其后ハ村民此山上ニ山神鎭座アリト云フト雖モ近世迄不入山ニテ人跡絶セシガ故山ノ中腹ニテ遙拜ナシ祈雩祈晴其他諸願ヲ込メンコナリシガ今ヲ去ル十八年文久二年郷中大旱魃ノ時此式地兩村別シテ甚シク諸神佛ニ祈誓ナスモ驗シナキトキ河野村名元役門脇俊平現在ノ盛永也休浴齋戒シ遙ニ山上ニ向ヒ祈雩ナストキ奇哉即時ニ大兩降リ穀苗再生シ多ク稔ヲ得ルヨリ村民感激ニ耐ヘズ協議シ初メテ深山ヲ攀ヂ登リ往古ノ社地ニ属テ小祠ヲ建築ス其時根元帝ノ奉祀シ玉フ神ナリ且此地ニ崩シ玉フ言傳ヘアルヲ以テ即チ安德天皇ヲ合祭奉レリ然ルニ此神靈俗人ノ登山ナスヲ忌ミ給フヤ年々村民ノ攀登スルトキ時トシテハ雷鳴シ又ハ霰ヲ降シ或ハ震動ナスヲ以テ一同恐畏シ自然再ヒ人跡絶ヘシヨリ社モ年々春雪ト共ニ消滅セントセシガ本年ノ初メ夏旱魃ノ際村民前規ヲ踐ミ山神ニ祈誓セシニ即チ神驗著キヲ以テ信徒日々月々ニ增加シ此度再建ヲ催フセリ

○安德天皇御事蹟ニ付播磨國ノ明細書

播磨國宍粟郡マガリ村ト言フ所アリ此マガリ村ヨリ二十丁東シ山ノ峰ニ村アリ凡人戸三十軒余リ此ノ所昔シ平氏ノ殘黨立籠リシ所ニテ村ノ人民多クハ平氏末葉ナリ此村上今ニ矢竹一對

ヅ、並ヒ出生ス是ヨリ又一里程川上ニ當リ安積ト言フ所アリ平氏ノ侍ヒ安積將監盛宗ト言フ人ノ古跡ナリ此ノ村ニ盛宗ノ子孫居住シテ今ニ連綿シテアルナリ此ノ所ヨリ因列但馬等ノ分レ道アリ右ニ登レバ但馬奥ニ出ス左リ道ヘ往ケハ上野奥谷小倉ト言フ村アリ至テ山中ニシテ幽谷ナリ峨々タル高山雲ニ聳エ絶谷溪深フシテ常ニ霞霧ヲ含ミ日光ヲ見ルヿ稀ナリ小倉村ノ奥ニ百丁余ノ峠アリ小倉峠ト言フ則チ播磨因幡ノ國境ナリ峠ヲ越テ三十丁余ニ落折村ト言フ所アリ往古平將修理大夫經盛卿一ノ谷ヲ遁レ殘黨ヲ引卒シテ此ノ所ニ落合タル所ニテ落合ナルヲ村民稱シテ現今落合村ト字シ昔ハ人輪ノ通フ道ナキ山中ナリ今此所ニ三十戸余リノ人戸有リ村民平氏一族ナルニヨリ平家ヲ氏トス此村内通行道ヨリ少シ離テ人家ノ裏手ニ當リ樅ノ木ノ大樹アリ經盛卿ノ墓標ト見エタリ下ニ貳間四面ノ切石ヲ以貳尺余リ四方ニ積ミ上ケタリ中央ニハ五段八重ノ石塔アリ其四方ニ五輪ヲ立置キタリ中央ノ五段八重ノ石塔經盛卿ノ墓標トス四方ノ角ニ在ル四ツノ五輪ヲ良等近士ノ墓トス側ニ人家アリ此家ニ經盛卿ノ弓並ニ馬ノ鞍骨アリ位牌アリ理德院殿深幽淨賢大居士ト在リ此村ニ經盛卿所持ノ茶器アリ平家松太郎ト言者所持ス此村ヨリ三丁山奥ニ氏神アリ是ヨリ半町程奥ニ杉ノ古木二本アリ上ノ山手ニ屏風ヲ立テシ如キ大石數多アリ其大石ノ中央ニ大ナル岩穴アリ穴ノ内凡十二三疊位廣キ岩穴ナリ

此穴ニ經盛卿隱レ住ミ玉フト言フ今ニ此ノ岩穴ノ土中ニ古キ唐津物在ルナリ是ヨリ北東ニ當テ三里余リ隔テ但馬境ヒ八東郡ト言フ所在リ此郡中ニ上私都中私都下私都ト言テ村數二十一ケ村アリ是ヲ私都谷ト言フ昔シ此谷奥ニ安德天皇平氏宗徒ノ諸將數輩引卒シテ潛伏シ假皇居ヲシ玉ヒ密ニ都ヲ造ルノ心ヲ以テ私都谷ト字スト言ヒ傳エリ上私都ノ内ニ落合村ト言フアリ極メテ山中ニテ村ノ中央ニ幅拾間程ノ川アリ水底深ク清水綠色ヲ呈シ三方高山帶ヒタリ實ニ無双ノ高山ニテ峰雲ヲ貫クカト思ヘリ此ノ村ヨリ凡ソ二十四五丁山奥ニ明邊ト言フ村アリ是ノ村昔シ　安德天皇源氏ニ世ヲ狹メラレ玉ヒ此ノ所ヘ御來臨在テ始メテ安堵ノ思ヒヲナシ玉ヒ夜ノ明タル樣ニ思召シ玉フニヨリ明邊ト字スト言エリ此村ヨリ二十丁余山奥ニ姫路村ト言フアリ此ノ村四方八葉連花ノ如ク八方ニ峰高キ山アリテ至テ要害堅固ノ地ナリ丑寅ニ當リ扇ノ山ト言無双ノ高山ニ連リ但馬奥ニ續ク人戸三四十有リ扇山ヨリ流レ更ニ水減スルヿナシ此ノ村則チ　安德天皇假皇居ノ場所ナリ東旗西旗ト言フ峰アリヌケ穴アリ村ヨリ少シ山手ニ當リ氏神社アリ是レ則チ皇居ノ跡ト言フ大木四方ニ繁リ一段高キ所社アリ　安德天皇拾三才木像ト大山祇神ト同社ニ勸請シ村ノ氏神ト崇尊ス此ノ社ヨリ一段低キ地ニ少シ離テ觀音堂在リ千手觀音ヲ勸請ス清水ト稱シ京都東山清水觀音ヲ寫セシ者ト見ユル此觀音堂ノ裏手ニ

小川アリ宮川ト言フ片目ノ魚アリ社ノ上手ヲ上ノ岡面ト言フ社アリ半町程隔テ山ニ少シ昇リタル所ニ杉木森アリ是森中ニ四十八塚アリ上中下三段ニ別レ列ス上段ノ中央ニ五段九重墓印アリ其前後左右ニ五段十二重五段八重ノ墓印アリ其外廻リニ前後左右ニ五輪ノ墓印ヲ列ス中段亦同シ且ツ五段七重ノ墓ニ前後左右ニ五輪ノ墓印ヲ列ス下ハ五輪ヲ列ス次ニ亦一段列ヲ別ナ中央ニ五段八重ノ墓印ヲ立テ左右ニ同シク五段八重ノ墓印シ中央ノ墓印ヨリ少シ小ナル墓印ヲ左右ニ建テ其左右ウシロニ數十ノ五輪ノ墓印ヲ列ス是レ正シク二位尼君姫典侍女官ノ墓ト見ユルナリ是ヲ二位ノ四十八塚ト宇ス亦上中下三段ニ列ヲ別ナ下段中央ノ五段九重ノ墓印正ニ　安德天皇ノ山陵也左右ノ五段十二重五段八重ハ則ナ敎盛知盛資盛行盛敎經等ノ平氏宗徒數輩ノ墓印ナリ其他村内ニ五輪ノ墓印所々ニ多分有之亦社ノ前水田アリ此ノ田ノ内ヘハ昔ヨリ牛馬ヲ入レズ肥灰等ノ穢タル物ヲ入レズ若シ誤テ入事アレバ忽ナ大熱ヲ發シ大病ヲ煩フナリ此村ヨリ道ヲ去ル二十丁山ノ中央小池アリ

安德天皇際期ノ池ト言フ此池ノ水ヲ末期ノ水ニ呑ミ玉フト言フ今ニ池ノ内ニ水草不生此池ヨリ十五丁余リ山ノ峰ヲ崩御ノ峰ト號ス八月十三日是ノ峰ニ昇リ玉ヒシニ急病起リ終ニ崩御シ玉フ故ニ崩御ノ池ト申ス臨終シ玉ヒシ跡ニ小キ社ヲ建テヽ是レアリ臨終シ玉シ所今ニ疊二枚敷程ノ間草木不生是姫路村奥扇ノ山ヨリ山脉ヲ連ヲ但馬奥二方郡湯村奥布引山ト言山アリ七里余リ峰ヲ續クナリ是ノ山續キ南ニ當リ東山西山ト言フ山アリ其山ニ續キ大高山アリ大樹茂リ日光更ニ照スコナク常ニ大蛇ノ住所ト言フ其山ト布引山東山西山ト峰ヲ續ク中央ニ平家ガナルト言フ所アリ峰平ニシテ廣野ノ如シ此ノ峰ニ平家ノ軍勢數多立テ籠リシ陣營ノ跡アリ今ニ此ノ峰ノ土中ヲ堀レバ古キ色々ノ陶器類出ルト言フ是ヨリ濱邊五里程北ニ當リ美含郡余部ト言フ所ニ高山アリ余部山ト言山中ニ數百丈ノ瀑アリ瀧坪深ク常霧ヲ含ミ日光ヲ隱ス此ノ瀧ノ側ニ大岩石アリ駒ノ蹄ノ跡アリ平將ノ舊跡ト言フ此山ニ金鷄ヲ埋ミアル故ニ鷄ノ鳴ク聲ヲ聞コアリ此聲聞コ在レハ忽ナ凶事アリト言テ人皆忌ミ嫌フナリ此ノ所ヨリ二十五丁海中ヘ差出シタル高山アリ御崎ト號ス此ノ丑寅裏テニ二十戸余リ村アリ此處平將ノ門脇宰相通盛卿籠リシ處ニテ殘黨此所ニ居住ス其後胤現今門脇仁兵衛ト名乘リ此所ニ居住ス通盛卿ヲ氏神ト崇尊ス赤旗及陣具等アリ其他古キ物アリ平家ノ士矢引六良山本喜平沖野宗左衛門子孫今猶存在ス是ヨリ三里東南ニ當リ仝郡畑村ト言フ處アリ平家カナルヨリ三里余リ東北ニ當ル伊賀平内左衛門ノ墓所アリ居住ノ地ニシテ其子孫今ニ伊賀平内ト言ヒ正月年頭ニハ必ス御崎エ參勤スト言フ平家カナルヨリ三里南東ニ當リ大屋谷ト言フ所アリ此奥ニ横行村ト言フ山中ニ村アリ

此所ニ平家殘黨潛伏セシ所ニテ此山中ニ武器ヲ埋ミシ塚アリ是ヨリ東五六里金原惠美ト言フ所アリ平家ノ殘黨ノ籠リシ處ニテ子孫今ニ存在セリ且但馬國二方郡前村ト言フ處ノ佛堂ノ天井ニ平家ノ侍數輩此所ニ落延ビ隱レタル舊跡今猶存在ス仝郡荒井村ノ内字横尾ト言フ所ニ湯本繁治良ト言フ者アリ　天皇ノ御裝束ヲ處藏セリ仝郡戸田村ニ大隅大納言ノ墓所アリ其子孫井上喜右衛門ト名稱シテ今猶存在セリ該家ニ鎧兜等ヲ所持セリ因幡國岩井郡鴨川ノ川上ニ荒井村ト言フ處アリ平左衛門ノ尉盛次昔シ此所ニ居住ス今猶其子孫平井平三郎及ビ平井新太郎ト名乘リ現居ス右平井左衛門尉ハ御典藥ニシテ御崩御ノ節奉藥セリトノコナリ仝國美含郡林村ト言フ所ニ能登守敎經ノ子孫現住ス林ノ又右衛門ト言エリ仝國法美郡吉野村ニ光良寺ト言フ寺院アリ御帝其他平家ノ士追善供養ノ爲ニ西蓮師即チ本名彌平兵衛宗清ト言フ者　天皇ノ一周忌相當シ大乘經ヲ書寫シ此所ニ埋メ經塚ヲ建テ黃金ノ釣鐘ヲ建立ス此釣鐘ニ知盛ノ建立ト彫付アリト雖モ施主ハ西蓮師ニシテ其他平家ノ一門姓名ヲ彫刻セリ但馬國美含郡鎧村ニ平氏ノ殘黨此所ニ留リ平將ノ鎧ヲ社ノ中ニ祭ル此ヲ現今村内ノ氏神トス且因幡國八東郡上私都谷〔即チ〕御陵墓本村姫路村　安德天皇御陵墓ヨリ上手之山上ニホヲヲヨガナルト言フ所アリ此所内裏跡ニテ山上五六町ノ平地ニシテ其中央ニ二反斗リノ小高キ處アリ此所ヲ古宮地ト稱ス仝村之西南ノ山ニ當リ凡貳丈廻リ位イノ杉ノ大樹アリ此杉ハ古昔ヨリ村民枝ヲ切ラス若シ切ル時ハ大熱ヲ發シ煩フト云フ但馬國城崎郡宇日村田久日村西村ノ間ニ越中治郎兵衛ノ墓アリ右兩村ニ平家ノ殘黨ノ子孫今猶現住ス

熟思フニ源平一ノ谷合戰其後八島赤間ケ關ニ戰ヒ平家利ヲ失ヒ赤間ケ關ニ入水ト言フ說アレ共仝ク歷史著者ノ誤ト思ヘリ平家一ノ谷ノ戰利ナキ故平氏ノ内ニ忠心ノ良等大將ヲ換エ赤間ケ關ニ戰沒シ宗徒ノ數輩ハ　安德天皇ヲ供奉シテ一ノ谷ヨリ奥播州三艸越ヨリ丹羽境ヲ通リ播州奥尖粟郡ノ奥カヤ谷ヨリ但馬奥ニ出平家ケ峰ニ落集リ夫ヨリ四方ニ分離シ鎌倉方ノ樣子ヲ探リ源家追探ヲ除防手當ト見ヘタリ亦　安德天皇ヲ姫路ニ假皇居ヲ搆エシハ平家ガナルヨリ布引山ノ峰ヅタイニ姫路ニ出要害ノ地ト見定メ此ニ皇居ヲ搆エタルモノ也其所以ハ平將所々ニ潛伏スルト雖モ但馬播磨因幡境ニ分居シ姫路ヨリ東南北ニ潛伏ス加フルニ平家ハ攝州播州ヨリ落來リ其路筋ノ跡ヲ防グ爲メナリ經盛獨リ因幡八東郡落折ニアルト雖モ是播州境ニテ播州路ヨリノ歇ノ便路ヲ防ガントト思ヒシモノト見ユ其他因幡國西ノ當リ鹿野ノ鷲峰山智頭等ノ奥高山數多在ルト雖モ姫路ヨリ西ニ當リ平氏一族潛伏古跡更ニ無之最モ作州境伯耆藏吉ヨリ凡三里程ニ人形山ト言フ高山アリ此所ニ千人墓アリ山上ニ鎧兜澤山アリト言ヒ何人ノ

籠リタルモ不分實ニ難所ニシテ容易ニ登山ナラズト雖モ之レハ源平ノ戰ヒニ關セサルモノト思フナリ且亦鳥取ヨリ二里余リ里程ヲ隔テシ所ニ法美郡岡益村ト言フ處アリ大茅谷ト言谷下モアリ南ニ山アリ山ノ麓ニ三十戸程ノ小村アリ岡益村ト言其村ハツレニ小キ山アリ鍛治山ト字ス此ノ山ニ石ン塔ト稱スル塚アリ疊一枚半亦ハ二枚位ノ石ヲ四方ニ立テ疊四枚敷位ノ塲所ヲ拵ヘ其上ニ芋ノ子ノ如キ長細キ石ヲ立テ其上ニ平ナル笠ノ如キ石ヲ三重ニ置キ其塚ノ前ニ一間半四面ノ四ツ堂アリ内ニ阿彌陀ニ地藏士ヲ安置シアリ其堂ノ前ニ疊十五六枚敷位ノ平地アリ庵室ノ跡ト相見ユ村民ニ尋ヌルニ　安德天皇ノ山陵ナリト言フ然ルニ其村ニ法福寺竹次郎ト言フ者アリ此者ノ屋敷ノ内ニ寶劒塚ト言フアリ　安德天皇ノ御寶劒ヲ埋ミシ塚ト言フ依テ昨年九月八日半尾得明林田小市良森安藏三名ニテ堀起セシニ劒類ハ更ニナク外ニ珍敷物モナク只陶器ノ花立ノ破損シタル物少シ出タリ然ルニ依テ地主法福寺竹次郎ニ委敷聞シニ法福寺ハ今鍛治山ニアリシ石ン塔ト稱スルハ全ク　天皇崩御ノ後ヲ設ケシニ昔シ眞宗ノ寺鍛治山ニアリシヲ中須村内ヘ移住ス其寺跡ヲ先祖買求メ家ヲ建テ居住ス故ニ寺號ヲ其儘法福寺ト苗字ニセシ由其塚ハ絶院ノ節佛具ヲ埋シ塚ナルヲ近頃村民寶劒ト字ナシ申ナリト答ヘシナリ亦石ン塔ハ法福寺竹次郎壯年頃ハ彼石塔ニ丸キ日ノ丸ヲ割ミ其ノ中ニ朱アリテ赤キ色ア

リシニ此頃ニハ石柔キ故ニ雨露ニテ朱モ落タリト言エリ亦タ岡益村ヨリ十丁程川上ニ梶原橋ト言フ有リ　安德天皇岡益村ニ忍ヒ玉フ時キ梶原平三此ノ橋ヨリ鉄鉋ヲ打懸ケシト言フ今ニ是ノ梶原橋ノ側山中ヨリ三角又ハ四角ノ玉土中ヨリ出ト言フ故ニ岡益村林田小市郎ト言フ者仝村鍛治山狹間土居ノ石塔ヲ　天皇ノ山陵ト申立委敷タヅヌルニ昔シ法福寺申眞宗寺ノ住職或日鳥取ノ近邊加露ト言フ處ヲ歩行セシニ夜中六七名ノ婦人濱邊ノ松ノ木ノ下ニ休ミ居ヲ見テ宗源婦人ニ尋ヲシニ是則ヲ　安德天皇始奉リ女官並ニ越中次良伊賀平内ナル故ニ供奉シ寺ニ歸リ潛イ奉リ其後姫路ニ隱シ奉リ置キシニ姫路ニ於テ崩御アリシ故法福寺天棺ヲ迎ヱ奉リ鍛治山狹間土居ニ葬リ奉リシナリ其節天棺ヲ一里毎ニ休メ奉リシナリ其跡ニ地藏堂ヲ立置クト言フ然ルニ姫路ハ私都谷ノ奥岡益村ハ法美郡大茅谷ノ谷川下ナリ殊ニ高山ヲ界ヘニ隔テ私都谷ハ八東郡ナリ亦岡益ハ法美郡大茅谷ノ下ナリ道ヲ去ルヿ四里半崩御ノ峰ハ姫路ヨリ一里余リ山奥ナリ殊ニ平氏一族悉ク姫路ヨリ東南北等ニアリ加之姫路ニ平氏數輩ノ墓アリ猶其頃ハ賴朝鎌倉ニ覇業ヲ開キ武威ヲ海内ニ震ヒ平氏ノ殘黨ヲ探ル折柄ナレバ姫路ヨリ山奥ニコソ葬リ奉リ山陵營ムベキニ何ゾ　安德天皇姫路ヨリ山ヲ越ヱ法美郡大茅谷ノ川下鳥取近キ廣塲ニ假皇居ヨリ四里半ヲ隔テ、近臣平族ノ居所放ラ(ホノヽ)獨リ岡益村ニ葬リ奉ルノ利ア

ランヤ君崩シ玉ヘハ殘ル臣等山陵ニ仕ヘ何ゾ香花ヲ供シ奉ラザラン殊ニ里近キ岡益村ニ山陵ヲ造營セバ恐ラクハ鎌倉ノ聞ヲ憚ン是ヲ以テ考フルニ全ク岡益山陵ハ眞正ニアラズ昔シ勇士一城主等ノ墓アリシヲ其主ノ知レザルヨリ後人　安德天皇ノ山陵ト言フ者アリ所謂一犬虛ヲ吼レバ萬犬實ヲ傳フノ理ナルベシ亦元暦ノ頃眞宗ト言フ者是レナク其頃ハ京都黑谷ニ法然上人念佛ヲ弘ル頃ニテ眞宗ノ元祖親鸞上人ハ小僧アガリナリ何ンゾ因幡國ニ末寺アルノ謂ナシ亦梶原平三ガ　安德天皇ニ鉄鉋ヲ向ケ奉シナドヽ言フ此頃ハ弓箭アレ共鉄炮等無之加フルニ二月比ハ風波嚴敷北海ノ荒浪南海ノ水夫猶船ヲ押フ能ハズ況ヤ女官及ビ越中次郎伊賀平内ノ如キ人ニテ小船ニ乘リ玄海ニ續ク西海ヲ乘巡リ漫々タル北ノ大海ヲ乘切リ因幡ノ國如露ノ濱ニ着船スルノ謂レ更ニナキ理ナリ岡益村人民ノ言フ所信用シ難シ

按スルニ昔シ君王崩シ玉ヘハ近臣皆殉死ス中頃ヨリ殉死ヲ止メ人形ヲ作リ替トス君王節ニ死ストキハ臣共ニ死ス本朝ノ常ナリ然ルニ恐多クモ　安德天皇幼帝ニシテワツカ六歳何ノ罪アリテ山陰ノ霞ニ隱レ玉ワン是則ヲ源平互ニ武威ヲ恣ニシ權威爭フヨリ起リシ者ナリ殊ニ外籍ノ平氏何ンゾ　安德天皇ノ崩御ヲ傍觀シ假皇居ヨリ四里半ノ遠キニ天棺ヲ送リ跡ニ平族止リ居ルノ理由アランヤ　天皇崩シ玉ヘバ平氏何ノ望有テ生殘ル不忠不義ノ名ヲ殘サンヤ死ヲ泉下ニ仕ヘ奉ルコソ至當ノ理ナリ依テ數多ノ墓印ハ其時殉死ノ塚ト相見エタリ

一本村内別紙圖面之ケ所ヘ存在セル山陵ハ

安德天皇之御陵ナルヿ古來ヨリ村民ノ書傳ハル所ナリ而シテ其來歷ハ凡七百五十在余年ノ頃　安德天皇此ノ地ヘ御臨幸被爲在暫ク御住居之處不圖御發病被爲在本村之西方ナル山上ニ於テ崩御被遊シニ依リ遂ニ清水岳ニ埋葬シ奉リ假皇居之跡ヘ一ツ玉躰ヲ調刻シ天王ノ尊像ヲ安置シ奉リ即ヲ當村ノ氏神ト崇尊シ奉リ來レリ

天皇之元暦之頃二月十三日御崩御ナリシニ依リ于今十二日ヲ以テ祭日ト定メ來リ候

○因幡國法美郡岡益村長通寺由來誌

抑々人皇八十二代安德天皇ハ壽永三年正月ヨリ文治元年三月ニ至ルマテ源平ノ戰ヒ熾ナルヲ以テ便ヲ都ヲ退去シ玉フ時ニ平家ノ一門ハ擧テ警護シ奉リ先ツ攝津國一ノ谷ヘト御遷宮召サレケル尋テ源氏ノ大將軍義經ハ其勢二萬余騎ヲ引率シ一ノ谷鐵拐ケ峰鵯越ヲ逆落ニ責メケレハ平氏ノ一族皆悉ク敗北シ隙ニ乘シテ幼主ヲ始メ奉リ二位ノ尼御前等ヲ相擁シ四國八島ノ浦ヲ要シテ御遷向之レアリケル折節風雨猛烈白浪滔天ナルヲ凌キ得テ之ニ上陸シテ且兵馬ヲ休メ玉フ既ニシテ源氏ノ首將義經ハ精兵纔カ三十騎ヲ擢シテ怒浪ヲ蹴蹴シテ追討ス於是平氏モ

亦敗レテ遂ニ豐前國文珠ケ關及長門國檀ノ浦赤間ケ關ニ常備シケル軍艦アリ之レニ據リテ以テ力ヲ究メ有無ノ擊戰ヲナス然リト雖モ敵ハ一騎當千ノ良兵ニシテ且ツ大軍以テ急擊スルカ故我カ軍皆悉ク殉死ス爭ニ長門國ノ住人紀伊刑部太夫道祐ト云者アリソハ新中納言知盛公ノ代官也味方ノ已ニ危急ト見ヨリ主上二位ノ尼等ヲシテ竊ニ船ヲ艤シテ之レニ遷シ奉リ三島ヲ指シテ落ナケル此時越中次郎兵衛ハ是ヲ見テ主上二位ノ尼殿等ハ已ニ入水シ玉フト披露シケル是レニ依テ二十五人ノ勇士ハ皆ナ海ニ沒シテ決死ス就中惡七兵衛越中次郎兵衛伊賀平內左衛門上總五郎兵衛飛彈守四郎兵衛等ノ五人ハ固ヨリ水練ノ達人ナレハ負カニ流ル、船ニ追ヒ就キ遁レケル四郎兵衛五郎兵衛惡七兵衛等ハ對馬ニ流レ行キ盛次家長ハ三島ニ流レケル去ル程ニ明レハ三月二十五日盛次家長ハ三島ニ於テ道祐カ船ニ乘リ合ヒ夫ヨリ唐土高麗ニモ渡ラント其企テ已ニ成リ主上二位殿ヲ始メ宮女殘ラス御供シテ船ヲ沖ヘ漕キ出シ通リ風ニ任セ何國トナク落ナ玉フニ程ナク隱岐國岩崎ノ浦ニ御漂着アラセラル爰ニ碇ヲ下ントスルニ偶々風波烈シクシテ伯耆ノ潟エト吹キ流レ其レヨリ因州加露ノ浦ニ御着シ玉ハントスルニ俄カニ黑雲起リ風烈シクシテ震動電雷シ天地モ崩ル、カ如シ故ニ御座船危クナリタレハ二位殿ヲ始メ宮女共驚キ噪キ立ナタルニ盛次家長ハ至誠ヲ抽シテ、天ヲ祈リ御座船ノ人々ニ力ヲ加ヘテ船

ヲ礒ヘト押寄セントスレモ已ニ風波最緊シクシテ吹流レテ今ハ叶ハシト感念シテ主上ガ帶ヒ玉フ所ノ寶劍ヲ海ニ投シ助ケテ海若ニ請ヒケレハ不思儀ニヤ俄カニ風波止ミケレハ盛次家長大ニ悅ヒ勇ミテ押寄セ漕キ立ツレハ難ナク湊ニ着シタリ於是主上二位殿等ハ上陸シ相ヒ共ニ有ラヌ命ヲ遁レタルヲ悅ヒ見越ノ松ノ根ニ皆々伴ヒ是ニテ休ミケル主上モ叡感斜ナラス二位殿ハ悅ノ余リニ千尋海に吹き流されしわが子船神も惠みをかくる玉なみ尼前ト讀ミ玉フニ早七ツ時ニモ成リケレハ歸ル宿木ノ鳥ノ聲濱ノ松風颯々ト心モスサマシキ波ノ音何國ノ浦ト問フ人モナク躊躇シタル所ニ我カ光良院ノ宗源和尙通リケレハ盛次見ルヨリ聲ヲカケ貴僧ニ尋ヲ申サン扨テコ、ハ何國ノ浦ナルヤト宗源答テ云ク因州賀露ノ浦ナリト言上シケル盛次重テ慇懃ニ宗源ニ語ツテ云クサテ我々ハ主人ヲ伴ヒ船中ニテ難風ニ遭ヒ困苦言ハン方ナク漸クニシテ有ラス命ヲ拾ヒ今マ茲ニ至リタレモ何レノ國タルヲ知ラス又何國ヲ目的トシテ出テタルニモアラス殊トニ世ヲ憚ル姫君ヲ相伴ヒタル事故其艱難モ亦甚シ伏シテ冀クハ貴僧ノ仁愛ヲ以テ好キ隱遁ノ處ヲ擇レンコトヲ宗源其次第ヲ聞キ熟々見奉リ暫ク感シ告ケ、ルニハ貴殿方ハ何國ノ人カ知ラヌモ誠ニ痛マシク存知ス故ニ賤ナキ拙僧カ卓庵ナレモ先ツ暫ク御休憩アツテ然ルヘシト云ヘハ即チ盛次家長等ハ大ニ悅ヒ主上ヲ始メ二位殿等ヲ相伴ヒ岡益村ヘト急キケル斯クテ御着ニ相成リ

宗源和尚ハ其待遇盡サヽル所ナシ

然而梶原平内景時ハ其勢纔カニ二十余騎ニテ此度平家ノ一門ヲ打ヶ亡シ己ニ天王始メ二位ノ尼等ハ皆悉ク入水シ玉フト聞キ此趣キヲ鎌倉殿ヘ言上セント竊カニ大將義經ノ麾下ヲ脱シ長州檀ノ浦ヨリ石州ニ渡リ其ヨリ出雲伯耆ヲ經テ因幡ニ至リ同國法美郡雨瀧村十王峠ヲ越テ關東ニ赴カントス其沿道ニ谷村ト云フ川越ノ處アリ偶々風雨烈シクシテ其勢ハ恰カモ海水ノ如シ故ニ人馬モ相通セス依テ詮ナク此ノ所ニ陣ヲ構ヘ一夜ヲ明シケル翌朝ニ至ツテ水勢増々強クナリ景時遠近ノ村々ニ命シ梯楷ヲ課出セシメ之レヲ連累シテ遂ニ皆ヲ通スルコトヲ得タル許リナリ故ニ大勢聲夜中ノ篝火等ハ恰モ軍中ノ如ク見エケレハ尼前ヲ始メ人々大ニ驚キ其景況如何ント相親フニ眞ニ追手數万ノ兵ト覺ヘタリ如何カ謀ラント議スルニ兩家臣始メ其策ヲ失ヒ唯狼狽スルノミナリ時ニ宗源和尚モ亦驚キ言上シケルハ是ヨリ南ノ谷ニ當テ峰寺ト云處アリ是レ拙僧カ弟子ノ住スル寺也是ヘ御越ナサルヘシト云兩家臣ハ大ニ悅ヒ直ニ宗源ヲ先驅トシテ主上及ヒ二位ノ尼等之ニ遷リケル（岡益村ヨリ峰寺越シハ此ヨリ通リ谷ト云又帝ノ假行在所ヲ西ノ宮ト名クルナリ）既ニシテ明レハ五月十四日兩家臣ノ者ハ密カニ宗源和尚ヲ招キ相告ケテ云フ誠ニ貴僧ノ厚義ニ依テ己ニ二旬余モ過キタレハ最早ヤ追手ノ患ハ之レ有マシト思ヒシニ豈圖ランヤ昨夜ニ至テ人馬ノ聲

ヲ聞ク故ニ亦モヤ追手ノ程心元ナシ是レ迄隱シ奉リシニ今更不慮ノ害ニ遇ハバ遺憾言ハン方ナシ何レカ窟竟ノ處ハ之レナキヤト宗源感シ入リ良ヤ久シクシテ一策ヲ案シ出シサテ此山奥ニ窟竟ノ處アリ先ツ是ニ御忍ヒアツテ然ルヘシト言上ス兩家臣者ハ大ヒニ力ヲ得然ラハ貴僧ニ案内ヲ請フト夫レヨリ宗源肯ジ奉リ其夜四ツ時頃ヲトシ誰一人モ通ラサルヲ幸ヒトシテ主上等ヲ相ヒ伴ヒ道ノ枝折ニ任セテソ行ク其村々ハ大坪市場福地村等ヲ經テ麻生村ニ御着シ玉ヘハ已ニ八ツ時ニ達ス行ク先又朧月落岩村ヨリ左ニ折レテ一線路ノ大澤深山ヲ打越ヘ主上ヲ家臣ハ負ヒ奉リ尼前ヲ始メ皆々モ倒レツ轉ヒツ行ク先キヘ早ク夜モ明ケヌレハ去來コヽニ暫ク休ミケル（此所ヲ爾來ハ明延村ト稱ス）宗源云是ヨリ二十五丁許リ北ニ當ツテ甑簟山トテ袋ノ口ヲ結ヒシ如ク鳥モ通ヌ好キ處也程ナク峠ニ登リ十八丁許リモ下タリテ見レハ湍々タル甘泉アリ亦タ五丁許リモ平地ニテ誠ニ摺鉢ヲ伏セタルカ如シ周廻二十五丁餘ニシテ嶺ヨリ谷ニ至ルマテノ處ニハ翠松綠柏ノ稠茂シテ欄柵ノ如ク亦タモ世ニ類ナキ窟竟ノ隱處ナリ於是兩家臣ノ者ハ大ニ悅ヒ此處ニ於テ假リ御殿ヲ造營ス扨テ柱ハ杉ノ丸太屋根ハ杉皮ノ重ヲ葺キ壁ハ杉葉ノ鳥羽重ヲ床ハ簀ノ草莚俄カニ相經營シ先ツ之レニ鎭座マシマス主上叡感斜ナラス及ヒ二位殿ノ悅ヒモ限ナシ兩家臣ハ宗源ニ相語ケテ云ク貴僧ノ厚義ニ依ツテ玉体恙ナク大遷行シ奉ルト是ヨリ

宗源ハ食物等ヲ所持シテ心形二役ニ汲々タリ二位殿ハ宗源ノ情ケヲ相ヒ感シ復タ追手ノ患ヒナキヲ共ニ祝着シ此上ハ主上ヲ守リ育テ奉リ唯タ時ノ至ルヲ待タントゾ（古へは月にたとへし君なれとその光りなき深山邊の里）尼前斯クテ盛次ハ大臣殿右衛門守殿等ハ當時何如ニ相ヒ成リ玉フヤ一先ツ上京シテ其様子ヲ窺ハント奏聞シ直チニ出立シ八東郡若櫻宿ヨリ但馬ニ出テ龜山ニ到テ茶屋ニ休息シ其主人ニ都ノ様子ヲ問ヒケレハ平家族滅シ大將父子ハ京師三條ノ西ヘ獄門ニ梟セラレタル等具サニ物語リヌ盛次ハ之レヲ聞キ無念ト思ヒナカラ左アラヌ体ニテ立チ歸ル

却説瓢簞山ノ内裏ニ都路ノ様子ハ如何ヤト待兼玉フ所ニ盛次ハ立歸リ件ノ物語リヲナシケレハ尼前ハ涙ヲ浮ヘ扨テ〳〵遺憾ノ至リナリ依テ想フ重盛ハ絶世ノ君子也何者ハ平家ノ滅亡遠カラサルヲ未前ニ察シ其身ハ命ヲ神ニ捧ケテ病ト稱シ唐土翁應山ニ祠堂トシテ金三千兩ヲ彌平兵衛宗清ニ持參サスト披露シタレヒ其實ハ宗清ヲシテ出家セシメ我家一族ノ菩提ヲ吊慰センガ爲メナリト此母ニ遺訓セシカト云ツヽ盛次家長ノ兩人ヲシテ宗清ノ行衛ヲ捜索セシメヲル尚ホ又兵庫築島ニ理メヲキシ用金三千兩ヲ堀出シ持參スベシト兩人ハ命ヲ承ケ瓢簞山ヲ出立シ若櫻宿ニテ相別レ攝津國西ノ宮ニ於テ出會センコトヲ約シ盛次播磨赤穗ヨリ姫路明石西ノ宮等ノ津々浦々ヲ捜索ス家長ハ但馬ヨリ丹波ヲ經由シ龜山ニ至リ夫ヨリ伏見ニ出テ八幡山崎ヲ縱横ニ尋テ西ノ宮ニ出タリ

然ルニ宗清ハ惜シカラヌ命ヲ存シ重盛御逝去ノ後ハ高野山ノ奥ノ院ニ於テ出家ヲ遂ケ西蓮ト改名シ殊勝ノ行ニ日ヲ送リケル其後平家ノ一族悉ク討死セリト聞クヨリ竊ニ石碑ヲ那和知山及四國播磨攝津高野山等ニ建立シテ追吊修善ニ左袒シケル尚ホ又本年八月十一日ハ御一族ノ三回忌ニ相當スルヲ以テ其回向料トシテ黄金拾枚ヲ攝津國摩耶山天王寺ヘ相ヒ納メ大法會ヲ營ミケル左レヒ世ヲ憚ルヿナレハ無縁供養ト披露シテ一七日ノ間執行シケル斯クテ家長盛次ノ兩人ハ契約ノ如ク西ノ宮ニ於テ出會シ相語ケテ云ク宗清ハ日本ノ地ニハ潜ミ居ルト思ヒ難シ強ヒテ尋ヌルモ無益ナリ是ヨリ用金ヲ持ヲ歸ル社ソ肝要ナリト云ヒケレハ實ニモト同シケル然レヒ莫大ノ金子ナレハ唯タ兩人ノミニテ持ヲ歸ルハ危シ幸ヒニ摩耶山ハ我カ主家ノ香華院ニ系レルコト故密カニ之レヲ住持ニ賴ミ用金ヲ持ヲ運ハントヲ是ヨリ兩人ハ同道シテ天王寺ニ到ルレハ殊ノ外賑ヒケル兩人ハ參詣ニ打ヲ紛レ參殿シケル西蓮ハ疾クヨリ兩人ヲ見認メテ密カニ住持ヲ招キ具サニ其由ヲ物語リシテ兩人ヲ方丈ニ引致シテ對面シケレハ兩人ハ大ニ悅喜シ互ニ無事ヲ賀シ良ヤアッテ盛次ノ云ク扨テ我等兩人ハ此度御臺所ヨリ貴殿ノ行衛ヲ尋ヲ來レトノ御下知ニ依リ已ニ數日ノ間彼コ茲ト相ヒ尋ヌレヒ影モ形モ知レヌ思案ニ盡キテ當寺

ニ參リタレハ圖ラサリキ貴殿ニ相ヒ遭ハントハ於是ニ同心協力シテ速カニ用金ヲ堀リ出サン
ト謀リ西蓮ヲ先導トシ兵庫ノ築島ニ到リ杭ノ下ヨリ採リ出シ三人同道ニテ因州八東郡瓢簞山
ヘソ持參シケル尼前ハ久シ振リニ宗清ニ遭遇シタルヲ悅ヒ辛苦ノ身ト成リタルヲ歎キケル西
蓮ハ恐レ入リ暫クアツテ重盛公ノ命ヲ奉シ枝未等逐一言レケレハ尼前ハ悲喜ノ涙タニ咽ビツ
ツ仰セラルモハ誠トニ珍シキ對面大慶至極ナリ此上ハ三人心ヲ合セ萬事ノ取リ成シヲ賴ムト
ソ

扨テ瓢簞山ノ仮住居長ノ月日モ早ヤ秋ノ半ハニナリヌレハ主上ノ御心ヲ慰メ奉ラントテ頃ロ
ハ八月十三日法美郡大茅ノ郷荒船村ノ山奥ニ眺望ノ好キ所アリト聞キ尼前ハ御幸キノ奏聞ヲ
ナシケレハ主上モ叡感アツテ上野山ニ御覽アラセラル二位殿ヲ始メ皆々供俸シテ小高キ所ヲ
占メ休御アラセラル四方ヲ御覽アリケルニ一目瞭然トシテ奇觀ヲ呈シケレハ主上ヲ初メ二位殿
等大慶ニテ暫シ興ヲ催シケル

昨にかわる都の玉すだれ木間見越や四方の浦　盛次

世の中の流れ勝れぬる此山のあは路こい路のあかぬをりめに　染葉

四方山の秋葉も時來れは君か花見の盛りあるべき　まさ浦

良ヤ暫ク浦山ノ御物語リアリケル所ニ天皇如何シ玉フヤ俄カニ御腦ミ玉ヘハ人々ハ大ヒニ驚
キケル盛次ハ懷中ヨリ藥ヲ出シ差上奉ル家長ハ直ケニ醫師ヲ迎ニ下リケル尼前ハ涙ナカラニ
膝ヲ枕トシ玉體如何ト撫ツ拔ツ致シケレハ天皇ハ水ヲ乞ヒ召サレ終ニ御崩御シ玉フ御享年拾
歳ニナラセ玉ヒケル實ニ文治三年八月十三日也二位殿等悲涙限リナシ則チ御尊骸ヲ光良院ニ
迎ヒ奉リ（麻生村延命寺村ノ二ケ所梵字堂ト稱スルアリ此レハ是レ上野ヨリ岡益村ニ至ル間タ一里毎ニ營ルヲ以テ之レニ天龕ヲ安置スルト云フ）宗源和尚ハ即時
ニ本寺磐若院ノ長通律師ヲ請シ天皇吊祭ノ引導師トナスト云フ而シテ天皇ノ御尊骸ハ正ク光
良院寺内ニ納メ奉ル即チ今ノ石堂是也（其后故アツテ寺ハ今ノ境ニ移シ光良院ヲハ長通寺ト改稱スルハ長通律師ヲ開山トスルカ故ナリ）此石堂
草創ハ文治三年ノ秋ヨリ同暦四年冬ニ至ルマテニ其堅一丈五尺四間四面ノ石塔ヲ建立シ且ツ
巨大ノ石鹵ヲ造リ其内ニ納メラルモノハ即チ天龕ナルベシ誠トニ稀世ノ靈場也其他尼前御法
体並ニ光良院ヲ再建セラル、等ハ別記ニ詳載スルカ如シ今ハ重長ヲ恐ル、カ故ニ玆ニ畧ス

右書類之外

安德天皇之御陵墓ト云ヘル箇所左ニ記之

一攝津國能勢郡出野村ニ傳フル處ノ經房ノ書ハ世人ノ知ル處ナレハ全文ヲ此ニ畧ス

一肥後國球磨郡球磨

一阿波國美馬郡祖谷

一[illegible]安德帝御出家ニテ此ノトコロニマシ〳〵タル故後ニ御髮ト御懷劍ヲ祭レリト云

一豐前國隱岐ノ里安德庵

此ノ處ニテ御落飾アッテ四十余歲迄マシマセシト云

一肥前國島原安德村

一長門國豐浦郡地吉村丸尾山

16
5
146

明治二十五年六月九日印刷
明治二十五年六月十日出版

非賣品

發行者　東京府士族　國分六之助　下谷區二長町五十一番地

印刷者　東京府士族　清浦嘉久介　下谷區二長町五十一番地

16
146

16
146

001482-000-5

16-146

安徳天皇御事蹟考

国分　六之助／編

M25

ACB-3948